

令和六年冬号
(2024年)

第541号

あたらしい道

【最も古いあたらしい道】

古くして 古きものは亡ぶ

新しくして 新しきものも また亡びる

最も古くして

常に新しきものは 弥栄える

あたらくいづくみ道は

最も古く上代(かみよ)の理

ふを言ひます

松本草垣女史語録より

あたらしい道

令和六年 冬 541号

目次

テーマ「最も古いあたらしい道」



ことのは

「最も古いあたらしい道」

……………1

日本の国柄

教育勅語

大阪 中野和典 ……6



リバイバル 座談会

先祖の徳を戴く	三重
病人に徹してみよう	埼玉 水頭昭三 ……14
男の一理に目覚める	岡山 小林完治 ……21





(表紙題字 松本草垣女史御親筆 とびら書 松下賀奈子さん)

編集後記……………63

連 載 羽曳野物語 (三) ————— 柳 田 節 ……48

大和撫子 静御前 ————— 神奈川 芹 澤 和 彦 ……40

日本の人柄 本居宣長 ————— 熊本 満 崎 安 ……34

追 想 喜びの下座 松竹梅 ————— 東京(故)長 塩 英 治 ……31



長野県 霧ヶ峰

ことのは

「最も古いあたらしい道」

かむながら

あたらしいく この道は

最も古い上代（神代）の理

——これを言います……

この道の理 遠い昔 神代の頃に

人間というものは こうありえ こうあるうえ

そういうふうな ことごとに 教えてある

それが道

まあく 時代の变迁 今の世に 〳かむながら〳を…

なんとまあ 矛盾です

神代の頃はみたま通り

あたらしい道 最も古い 神代の頃

神代の頃は みたまさんが みたま通りでした

今の日本は だろくくく 泥んこだらけ

そうなっちゃった

それにはく 心というものが しにくかったです

この国の一番古い高い道

この道 あたらしい 今の世では

なれど この国の 一番古い 高い道なり

日本の 本当は 古神道

それが段々 私によって 世に見せる

それ かんながら…

(松本草垣女史語録より抄)

最も古くして常に新しきもの

古くして 古きものは亡ぶ

新しくして 新しきものもまた亡びる

最も古くして

常に新しきものは 弥栄える

朝の太陽は 最も古くして

最も新鮮な 久遠の存在である

あたらしい道は

最も古い 日本民族の道統を

現代に 新しく復元する

世界の和平と繁栄に通ずる

朝の太陽の道だ！

(松木天村先生の詩より)

【ご垂示】

男の一理を

お前さん達 男だけれど この道は 仕方ない
女であるやかたに つつかれました
それだな それをな 吾に 受取っている
それならば 男として 男の理 男の一理
国替えの そこにく 何かがある
国替えの素地が 皆さんに おーく 分かつたらしい
これ丈を申しました こういふ道です

(昭和四十九年十月二十五日より)

何かの時は自分を忘れるのが当たり前

もうこれからはな 自分は自分 人さんは人さん

だけどく 何かの時には 必ずく お前さん達は

そうだくで 身の内から さあくくくく その通りく

これが理です お分かりでしょう

心とは違う みたまそのものだから

そうだく 自分を忘れるのが 当り前です

そうだく 素晴らしいんですよ これが本当です

必ずく 天上からです フトしたことから

そうだく わいてく わき了すんです

それが みたまさんです

そうだく 必ず 素晴らしいんです

(昭和五十四年十二月六日より)

教育勅語

大阪 中野和典

今から十年以上も前に東京に行く用務があり、合間の時間を活用して明治神宮に参拝しました。長らくの思いがかなった初めての参拝でした。

多くの参拝者があり、外国人の観光グループの姿も見られ、日本人ガイドから手水や柄杓の使い方や拝礼の仕方の説明を受けて忠実に行っていた様子が印象的でした。

御神樂を奉納して御神酒と小さな折り畳み冊子と『大御心』と題する新書サイズの冊子を授ると、折り畳み冊子と冊子には、「五箇條の御誓文」、明治天皇御製・昭憲皇太后御歌、「教育勅語」が収められていました。

「教育勅語」はその名は知っていましたが、内容はほとんど知りませんでした。

手にして「教育勅語」を一読し、二読し、徐々に繰り返し読んでみると、わからない言葉もありますが、そうだそうだ、そのとおりだ、これが日

本の国柄だなど、何か胸の中がすつとする気持ちにさせられ、納得させられたのです。

それは人として国民として祖先が永きにわたって行なってきた教訓があり、天皇・皇室が守り伝えてこられた伝統であり、古くから続く日本という国は、もとより天皇と国民が大家族（＝国民全体が天皇を中心とした大きな家族）であるという思いによつて成り立っている国柄であることが表されていたからなのです。

そして明治天皇が、御みずから「この教訓をいつも心にいだいて実践するので、国民みんなも一緒にこの教えを守り実行して徳を積んでいくことを願う」と、明確な御決意と呼びかけを私たち国民に親しみを込めて語りかけてくださったいたからなのです。

私は、子供のころ親からしつけられたことや、親せきのおじさんらから聞いた現代の世相に対す

る感想談の奥に、何か国や人間のバックボーンとして大事なものがあろう、何だろう、とぼんやりと思われた記憶がありますが、その大事なものは明治二十三年に出されたこの教育勅語に、日本の国柄から成る人としての在り方が表わされており、戦前の教育で国民にあまねく浸透していたのでした。

すでに学校で「教育勅語」や「修身」を教わることがほとんどなくなってしまうのですが、現代社会の政治、教育、科学技術、環境、家族制度、国際関係などあらゆる面で、国家から個人に至るまでの混沌とする様々な情勢・事象・事情を鑑みる時、「教育勅語」にある永く受け継がれてきた日本の国柄と人としての在り方というものが本当に大事なものであるとつくづく思われました。

その後、折にふれ通勤時に鞆から取り出してはしばしば読んだり、日頃の生活の中で声には出さないけれども時々覚えているところを口ずさんだりしているときに、いろいろな思いが出てきます。

親に申し訳なかったな、家族友人らにすみませんということがあったな、俺は出来が良くなかったな、国のことをあまり思っつてこなかったな、そ

して、先祖がこれまでよくずっと続いてきてくださったな、天皇陛下が国安かれ民安かれとお祈りくださっていることは心から有難いな……というようなことがしばしばフツフツと湧いて出てきます。

あたらしい道で思いの修養をさせてもらっており、親を戴く、お父さんを戴く、人さんを戴く、国を思う、天皇陛下を奉戴する、そして自分が至らなかつたと気づいたところを天にお詫びをし、また、気づかせていただいたことを天にお礼申し上げ、思いを整理することは、普段の大事な修養でありますので、今もそのように湧いて出てくる思いを一つひとつ整理させていただくのです。

最近のことですが、ある人（道友）と教育勅語の話になり、もうずっと以前から毎日声を出して読んでいるよ、^{そら}語んじることでもできるし、教育勅語の徳目を実行し修養しながら自分を磨いて体得している実感があるよ、と聞き、確かに誰にでも通じる真実普遍的なものだと思いました。

ここで、教育勅語の原文を明治神宮ホームページ等を参考にして、現代かなづかいによる読み方で掲載させていただきます。

教育勅語 (現代かなづかいによる読み方)

朕惟ちんおもに 我が皇祖皇宗こうそこうそう 國くにを肇はじむること宏遠こうえんに 徳とくを樹たつること深厚しんこうなり 我が臣民しんみん 克よく忠ちゆうに克よく孝こうに 億兆心おくちようしんを一いつにし 世世よよ厥その美びを濟なせるは 此これ我が國体こくたいの精華せいかにして 教育きやういくの淵源えんげん亦また此こに存ぞんず

爾なんじしんみん臣民しんみん 父母ふぼに孝こうに兄弟けいていに友ゆうに 夫婦相和ふうふあいわし 朋友相信ほうゆうあいしんじ 恭儉きやうけん己おのれを持じし 博愛衆はくあいしゆうに及およぼし 学がくを修おそめ業ぎやうを習ならい 以もちて智能ちのうを啓發けいはつし 徳器とつきを成就じやうじゆし 進すすんで公益こうえきを広ひろめ世務せいむを開ひらき 常つねに國憲こくけんを重おもじ 國法こくほうに遵したがい 一旦いつたん緩急かんききゆうあれば 義勇公ぎゆうこうに奉ほうじ 以もちて天壤無窮てんじやうむきゆうの皇運かううんを扶翼ふよくすべし 是かくの如ごときは 独ひとり朕ちんが忠良ちゆうりやうの臣民しんみんたるのみならず 又また以もちて爾祖先なんじそせんの遺風いふうを顕彰けんしやうするに足たらん

斯この道みちは 實じつに我が皇祖皇宗こうそこうそうの遺訓いくんにして 子孫臣民しそんしんみんの俱ともに遵守じゆんしゆすべき所ところ 之これを古今ここんに通つうじて謬あやまらず 之これを中外ちゆうがいに施ほして悖もたらず 朕爾臣民ちんなんじしんみんと俱ともに 拳拳服膺けんけんふくようして 咸みな其徳そのとくを一いつにせんことを庶幾こいねがう

明治二十三年十月三十日

御名ぎよめい 御璽ぎよじ

初めのほうに「…国体の精華
…」とありますが、申すまでも
なく「国体」（國體）とは国柄
のことを指します。日本の国は
「にほん」とも呼びますが、次
のようなおやかたさまのお示し
があります。

日本の国は二本の紐じや
一本が天子
一本の紐がおまえら皆じや
この紐を世界中眺めても
ないんじや
この国にのみ
二本の紐がある……
天子さまがある
その 天子さまを
理のもととする
おまえら一人／＼も理のもと
理のもとが二つある
これ 世界にない

このお示しで、日本が、万世一系の天皇の皇統と祖先から続いていく国民の霊統によつて成り立っている国であることがわかります。このことは、日本の国柄そのものであります。

また、古事記では大国主神の国譲りの話の中で、我が国の国柄が、「ウシハク」国ではなく、「シラス（知らすし治す）」国であり、支配してではなく、和することによって治め、治まるといふことが記されています。

歴代天皇が国民の幸福をご自身の幸福と思召され、国民はその御心に魂を揺すぶられ、和して力を合わせてまとまるといふ姿が、シラス国の現れであります。

明治天皇御製

照につけ曇につけておもふかな

わが民くさのうへはいかにと

国民のうへやすかれと思ふのみ

わが世にたえぬ思なりけり

教育勅語が、時代の流れによりいろいろな解釈

をされた経過がありますが、おやかたさまのお言葉で明らかにされた日本の国柄は絶対であり、また、歴代天皇の国民への御心は真でありますから、ともに誠の思いで十分にいただいて、日本の国柄から成った、普遍的な人としての在り方に一歩でも近づき体現して、世のため人のためになれるようにと思ふのです。

おやかたさまが、昭和三十四年八月、ある教育者に対してお示しにられた中に次のような一節があります。

かみながらは教育とは云わん

教えるという

育は育む 親が子を抱くことである

教育とは 何時の時代からか 間違っている

教えるでよい

家におる時 子はのびる

親が子を育み 見本を示して子に譲る

これ 育みである

親が子を大きくする、すなわち子を育てること

の、古いにしへからの自然本来の姿が浮かびます。

親おそが子に教え、子は親に教おそわる。親おそが子を育み、見本を示して子に譲る。この見本とは、子を抱くぬくもりで伝える親の人としての在り方であり、また、連綿と続く親子のつながりそのもののように思えるのです。親はそうして子に教おそえ、子は成人していくのですね。

「教育」という言葉は、明治時代に西洋文化の流入に伴い「education（エデュケーション）」の翻訳語として、子育てや学校での教授活動や人の育成などを抽象的に示す言葉として使われるようになったようですが、子を養い、しつけ、育て、導くことの自然本来の姿の本質は、お示しどおりで今も変わりようがないと思います。

おやかたさまが、昭和二十七年に「国があぶない」と身の内から言わされて以来、日本はどん底まで落ちるとも言われ、今や日本と私たち日本人はかろうじてその良さのいくらかは何とか保ちながらも、あらゆる面で厳しい困難な状況に直面しています。

日本が立ち直るためには元の日本に還らなければならぬとおっしゃいます。元の日本とは根の

国日本に還ること、根の国とは地上に生きる私達日本人がどんな困難があつてもそれに耐え、本当の自分である「みたま」の差配どおりに喜んで生き、お互いに手を取り合い、助け合つて生きていく国であると言われています。

私達はその典型は、縄文時代の社会であつたと解釈していますが、約一万六千年前から約二千四百年前では、あまりにも古すぎるため、元の日本に立ち還るといつても実際にどのような在り様かは想像するよりほかありません。比較的新しい元の国・根の国の手近な見本は、なかつたのでしょうか。

それは明治時代の日本だそうです。おやかたさまは私達に、昔の日本、明治の頃の世に多少でも似つくようにしいかえてほしいとおっしゃいます。明治時代について次のようなお言葉があります。

明治の人は子供の頃を思い出す

（『根』第四十一号一一三頁）

……大体明治の人はね、ご自分達のチッコイ頃の事を思い出したらね、そしたらその頃に、大人の方の話してらっしゃったことはね、皆みなんなこれ

はね、もう理であって、義であってね、そう。(総)ですよって云うんですね。：そしたらね、本当にね、明治はやっぱり有難い頃であって云うんですね。

明治の御代を拝む

(『根』第五〇号一二七頁)

明治天皇の、あの頃は、厳しい御代みよですわね、：何れね、明治二十七、八年(日清戦争の頃)の様な、臥薪嘗胆がしんしょうたんの、厳しい時期が、一遍通り来ます。

：その時期をね、一つ越してこそね、ズーツとこう上るんだそうでございますね。

〃臥薪嘗胆がしんしょうたんなんて、今の若い方はびっくりなさるでしょうけどね、でも、これは何でもないんですよ。暫くお行だと思つて、ギュッと辛抱すればいいんですからね。

昔の日本に還る

(『根』一一〇号一二七頁)

これからの日本は どうしても 皆みなんなさんによつて 何とも云えない それはく

〃昔に還るんだ 昔の日本に還るんだ〃

それが必要なんです

〃今時の人は 総てが総て 思い方が違っているだから これでは駄目だ〃

こういう事です

それでく 皆さんによつて 今からですよ

〃どうしても 日本人らしく 建て替えてほしい〃

〃そういう事なんです そうしたら やっぱり

昔々 それは 明治の頃です

〃その頃の世に 多少でも 似つく様に この道

のお方は 昔を想い出して そういふ風に ボチ

くくく しいかえてほしいなあ〃

：日本という国は 地味な国なんです その

日本が派手になり過ぎました これから変えるん

です

その頃に少しでも似つくよう、これからも明治の御代に思いを巡らし、明治天皇と明治の先祖の方々が厳しい困難に耐えられた忍耐と勇気を見倣いたいと思います。

以前は国のことを思うことが少なかった私ですが、おやかたさまのお仕込みによつて、日本の有

難さと大事さをだんだんわからせていただくようになりました。

国位、つい国位とは 思わんが

うっかり国を 忘れとるはず

あたらしい道の理である、親を戴き、人さんを戴き、自分に厳しく人さんに裕となし、世のため人のため自分を忘れて精魂尽くすこと、君と民の思いが合うこと、先祖の加勢が得られること等は、教育勅語に表され、また言外に読み取ることができます。

それらとともに、今あることを喜べるよう日頃の修養に励ませていただき、お国のために本当の自分であるみたまさんにお応えしなければと思うところです。

そして、現代にあつて国難ともいえる多くの自然災害や緊迫しつつある国際情勢や混乱する国内状況の中で、国と国民の安寧をお祈り賜っている今上陛下の御心に、謹んで有難く静かな喜びの気持ち湧かせていただくのです。

昭憲皇太后御歌

君きみと臣おみの心のいろにうつさばや

いつもかはらぬ松のみどりを

* * *

〈関連資料〉

「古事記」 (倉野憲司校注) (岩波文庫)

「皇室と國民」 木下道雄 (皇居外苑保存協会)

「天皇の国史」 竹田恒泰 (PHP研究所)

「昭和天皇の学ばれた教育勅語」

杉浦重剛 (勉誠出版)

「道徳教育と愛国心」 大森直樹 (岩波書店)

「くわしすぎる教育勅語」

高橋陽一 (太郎次郎社エディタス)

「13歳からの教育勅語」 岩本努 (かもがわ出版)

「君は教育勅語を知っているか」

津田道夫 (社会評論社)

「『教育勅語』のすすめ」 清水馨八郎 (日新報道)

「ヤマト人への福音」 赤塚高仁 (きれい・ねつと)

機関誌「あさ」 第二九号

巻頭言 // 教育に於ける革新の原点が 松木天村

機関誌「あたらしい道」

第五一九号 // 日本の国体を戴き直す //

板崎雅光

第五二八号 // 天皇と国民 //

内藤賢太郎

第五二〇号 // おやかたさまのお言葉 //

第五四〇号 // 日本の課題と日本人の在り方 //

市野道明

〔コラム〕 教育勅語 (教育二関スル勅語)

明治天皇は激動の幕末・明治

きました。

維新を経て、文明開化により我が国が激しく海外の思想や文化

第一回世界道徳会議(ロンドン)で日本の道徳教育に各国が瞳目

などの影響を受け、良き日本人の精神と倫理道徳の伝統が損な

し、翌年文部省による公式の翻訳『漢英仏独教育勅語訳纂』が発行されます。

われそうになっていくことをたいへん憂慮され、日本人が祖先

教育勅語は時代に合わせた解釈が行われ、太平洋戦争時には軍国主義からの解釈がなされ、

から受け継いできた美徳と人としてあるべき姿に根ざした教育

それに利用されました。終戦後、連合国軍最高司令官

の基本方針を「教育二関スル勅語」(教育勅語)によって国民に

総司令部(GHQ)が、教育勅語の趣旨に沿っている「修身」

語るようにお示しになられました。

は、軍国主義的及び極端な国家主義的観念を植え込むために利用しているとして、政府に授業

その後、初等教育等で使われる修身科の教科書が教育勅語の

趣旨に沿ったものとなり、教育勅語の徳目が国民に浸透してい

る趣旨に沿ったものとなり、教育勅語の徳目が国民に浸透してい

以後、政財界や教育界・社関係者らによる教育勅語の再評価の動きや、さまざまな議論や

停止・教科書回収の指令を出します(昭和二〇年(一九四五年)十二月)。
また、新憲法下の国会で教育勅語の存廃について議論され、衆議院では「教育勅語等排除に関する決議」、参議院では「教育勅語等の失効確認に関する決議」が昭和二十三年(一九四八年)六月に全会一致で決議されたことにより、日本の教育現場から姿を消すこととなったのです。

以後、政財界や教育界・社関係者らによる教育勅語の再評価の動きや、さまざまな議論や論説・研究がなされています。

先祖の徳を知る

三重 水頭昭三

銀行から企業へ出向

——水頭さん、いかがですか。ご自由にどうぞ。
水頭 私は平成三年十月のおつながりでございます。

東海銀行におりましたところ、名古屋の建設会社に出向を命じられました。社長が高齢で、ご子息が若年なので、専務として赴任しました。銀行には二十六年、この建設会社に十四年在職していません。

建設会社の社長が、たまたま明治大学の先輩、しかも同じ商学部でございます。非常に知名度の高い人でしたから、同窓の経営者の集まりが百二十人ばかりございまして、月一回の朝食会がありました。その幹事が鈴木陽太郎さんだったのです。

激務の毎日

——鈴木さんは四、五年後輩になるのに共鳴されたというのは、どういうことだったのですか。

水頭 以前から、「根つこの会」という会を、鈴木さんが世話されていましてね、名古屋の知名人を集めておられました。八十三歳の大河内さんもおられて、その影響があつたと思います。

それに私は、佐賀県の出身でございます。わが家は、西本願寺の宗会議員をやっておりますから、小さいときから、朝夕の礼拝をしないと、ご飯が戴けない、寝かしてもらえないという風でした。私の兄弟も軍人ばかりという、厳しい環境に育っておりますので、宗教経験こそありませんが、精神的なお話は聞くことができました。

しかし、本当のところは、私自身の根つこは枯死寸前だったのでしようね。忍耐することが銀行

マンの習性になっていまして、これという自覚はなかつたのですが、家に帰ると情緒不安定になり、無意識に、安心立命を求めていたのだと思います。銀行ではエリート界の競争という、いわば順風満帆で来たものが、建設会社へひとりで乗り込んで、荒くれ男を使う立場になったわけです。

「横から来て、俺たちに指図するのか」と口では言いませんが、一番厄介なところを私に押し付けて、手を叩いて喜んでいるという風なんです。そういう時に限って、十億、二十億といった引っ掛かりが出ますしね、夜、黒い服を着たのが付いて来るんです。

(何とか助けてくれないかな)と思っても、外には一切出せません。銀行の面子がありますからね。(何かを信じて強く成らなければなあ)という願望が、鈴木さんのお誘いがあつて踏み切れたわけです。

ご先祖の徳を戴いて

一日研修にまいりまして、場の空気に触れたり、世話人さんのお話を聞かせてもらつて、今までの心のオリがどんどん洗われていくようでした。つ

ながつてすぐに、三日当番に入れて戴きました。

正直言つて、この道のことは、まだ何もわかつておりませんが、「よき人に交われれば、よき人になる」と言います。この道の方は霧の中を歩けば自然に湿ってくる、そんな方たちだと思つております。

——銀行から行くのは、会社建て直しというところで、最高権力者ではないんですね。

水頭 建て直しの出向と、より会社を成長させようという場合があります。この建設会社は、当時一流でありまして、四、五百億やつておりました。投資育成会社として、国の資金も入つておりましたし、一行取引先でしたから、経営のお手伝いということで、鼻息が荒いわけですよ。

——水頭という苗字は珍しいですね。

水頭 鍋島藩の軽輩だったんでしようが、農民の水の分配係ですね。そういうことで、一族郎党の醤油とかジュースとか、水に関係した商売をやつておりまして、わが家は酒造業で、ずっとまいつておりました。

現在は、四日市駅前にあるホテルに出勤しております。百四十五室ほどの規模のもので、今回は前の出向とは逆なんです。バブルの時代に、百億超えた融資金でやっておりますから、利息返済と償却負担で大変なんです。これからは、こういう会社が多くなると思いますね。

ところが、私自身は逆に落ち着いちゃったんです。三重県の長島温泉に永住するつもりで、去年、本籍も移しました。

この道にご縁を戴いて、あらゆる意味で、ご先祖の徳を戴いていることを分かせてもらいました。

また、今までは、（俺がやって来たんだ）という気持ちがありましたけど、（自分の力なんか、本当に知れたものだ）と思うようになってから、逆に、力が湧いて来るように思えるんですね。有難いことです。

〔月刊誌〕平成六年十二月号より



—— 身上で思わず自分を放る ——

病人に徹してみよう

埼玉 加藤 實

見守られていた四年間

加藤 私は昭和四十九年二月のおつながりですが、初めての「三月下座^{みつきげざ}」を五十二年の一月からやりました。ところが、その後、「お仕込み」が四年経つても一度もないんです。当然、皆さんから色々言われますね。

自分でも（下座の次は当番だ）と、よく分かってはいるのですが、私は非常に気が弱くてね、当番に入ると、「ねりあい」の司会なんかやらされるでしょう。「あれは苦手だ。司会を勘弁してくれるんなら、今すぐにでも当番に入るよ」と言うてきました。

ところが、ある日、三時のお茶のときでした。あんまりうるさく言われるので、「よし、俺は五日当番をやるぞ」と宣言しちゃったんです。

そうしたら、その夜、「加藤、お仕込みだぞ」と言われた。（また、かついでるな）と思つていたら、本当に、お仕込みだったんですね。そして、非常に厳しい内容でした。

「お前さん 道の者としてそんなことではどうにもならんでガツカリですよ この道になり切つて精一杯ですよ」

帰りの列車の中で、（待てよ。四年目にして、突然仕込まれたということは、おやかたさまが毎日々々『加藤、今日はどうか』つて、四年間もジーツと見て下さつていたに違いない。全く申し訳なかつたなあ）と、初めて、親の想いに触れることが出来たんです。お詫びをさせて戴きました。

身上で思わず放った自分

その年多分、十月と覚えていますが、東京道場の宿直に当たっていたんです。その前にたまたま、取引先の新築祝いで、ご馳走に呼ばれていたんですね。道場では月例会があつて、また一杯やつて寝たんです。初めてトイレに立ったとき、フラフラ程度だったんですが、三回目行つたときは、這つていくようになって、用を足したあと、とうとう倒れちゃつたんです。

まずは、道友の岡田先生のところ、遠いから長いことかかりましたね。それから東邦医大を紹介されて、診断は十二指腸潰瘍。空き部屋がないというので、一度、家から迎えに来てくれてから、再び病院に運ばれました。

ようやく病院に着くと、点滴しながら一日中寝かされました。苦しかつた夜を思うと癪に障るわけですよ。入院が長引くとなると、場の当番や会社のことも気になります。

ぐじゃぐじゃ考えていて、(息子の結婚も近いなあ)というところで、ふと、理立てのことも思ひ浮かんできました。そして、(なぜ、こんなことになるのかなあ)と思つたんですよ。

病室は九時の消灯になりましたが、眠つては申し訳ないという気がして、電灯だけ消して、ラジオのスイッチをポンと入れました。

その瞬間、「病むなら病んでしまえ。死ぬのなら死んでしまえ」つて、イヤホンから聴こえてきたんです。

私は思わず、ベッドから起き上がりまして、南の方を向いて、お詫びを申し上げました。そして、(そうだ、病人に徹しよう) そう思われたんですね。

——ドラマのようですね。

加藤 いや、舞台の一場面かなんですね。女性の声でした。私はそんなことより、自分のことばかり考えていたのが申し訳なかつた。また、すぐに思ひ上がる自分も恥ずかしかつたです。

しかし、それで病気が怖くなくなりました。翌日、「輸血も調ととのいましたから、やつちやいましょう」と言われましたが、「先生には申し訳ないけど、病人のままでもいいですから、このままでお願いします」ということで、三週間の予定を、二週間退院したんです。

糖尿病が原因だったんですね。全然分からずに行きました。しばらくして、歯の治療で大病院へ行きましたら、「この抜歯は、検査が必要です」と言われました。内科に回されたら、糖尿病だということですよ。

即入院で、「まあ、三週間ですね」それから食事療法ですね。家内にも口止めして、道友はもちろん、会社へも、病院を抜け出して顔を出しました。九階でしたから、階段を上り下りして、二週間で六キログラム痩せました。主治医も、「その調子なら、まあいいでしょう」と言つて、退院許可となりました。

出るときに、証明書を書いてくれるんですね。手帳に「私は糖尿病です。もし倒れたら……」と書いてある。

(今度は、糖尿病とお付き合いか) と思いましたが、けれど、病人のままで行くわけですから、気にもしませんでした。

きれいな身の内になるよう導いて戴いて

その後、何という事もなく八年が経ちました。私のところは鍛造メーカーですが、たまたま台

湾視察旅行の団長を仰せつかつたんです。そして、その帰りに場へ帰参したんですね。

飛行機に乗ったときから、(俺、おかしいなあ) と思いました。いつもペロリと平らげる弁当が、欲しくありませんよ。

そして、場へ着くなり、調子が悪くなりました。早々に休ましてもらつて、朝方でした。トイレに行つたところ、お腹の方からガーツと来て、洗面器へガバツと吐いた。二度、三度、割と美しい鮮血でしたね。

貧血なんでしょう。意識は明瞭なのに、立つて居れなくなつて、のけぞるようには倒れました。倒れながら、一瞬、(これでいいんだ) と思いました。それから、(有難いなあ、これで治つた) と、しきりに思わされるんです。

東京道場のときは、村松さんの息子さんにお世話になりましたが、今度も村松兼次さん本人が居られたんですよ。平生から親しい間柄ですので大助かりでした。皆して、静養室へ運ばれて、二日間安静にしておりまして、月曜日に列車に乗りました。

東京に着き、近所の医者に診てもらつたら、「ど

うして、大阪で入院しなかったんだ」と言われま
した。

ところが、私はその足で会社へ出て、そのまま、
現在まで何ともないんです。それどころか、現在、
糖尿がないわけですよ。検査してもらっても正常
値です。潰瘍もなくなっているんですね。普通に
飲み食いして、タバコも喫っています。

こんな憶測が許されるかどうか分かりませんが、
あの吐血で、悪い血がでちやつたんじやないで
しょうか、そう思いました。

身の内をきれいにして戴いて、これから、世の
ため人のためお役に立たせて戴くんだと、改めて
思わせて戴きました。

（「月刊誌」平成六年十二月号より）



——人の道より以上とは——

男の一理に目覚める

岡山 小林完治

天職の果たし

——（加藤 實氏のお話に続いて）丁度、お医者さんがいらつしやいます。小林さん、如何でしょうか？

小林 そうですね。「（加藤さんのお話の）吐血で悪い血が出てしまった」というのは、そのとおりで、よかったですね。血が変わったとおっしゃった。思い（気）が変わり、それと同時に潰瘍がなくなつたということですね。

それは、みたまさんの能きでしょうね。「有難いなあ」と喜ばれたのが凄いですよね。常人ではそうは思えない。おやかたさまに育てられた有難さです。

——小林さんは医学を通して人を助ける道に入られたのですね。

小林 私は、天職の医学を通じて世のため人のため尽くそうと思っていました。ところが、天職も人の道だったのでね。この道は、人の道以上と言われていることであとで気づかされました。私は、大学を出てから、生化学という基礎医学の分野で、教官をしております。しかし、その頃に長男が病気をしまして、寝たきりの状態でした。

基礎医学の研究では生活が維持できにくいので、臨床の方へ変わりましたが、そこで机を並べたのが坂戸さんでした。昭和四十七年です。

子供は熱性けいれんの後遺症で、五年後に亡くなりました。九歳でした。この子の病室のために

と、開業の準備中のことでした。

昭和五十二年、道友の岡部さんが腎臓透析で通院治療に來られました。私は開業医として奮闘していました。岡部さんが毎月持つてくる、あたらしい道の月刊誌も、すぐにゴミ箱に入つておりました。

それから、おつながりをお戴くまでの五年間は、折に触れて道のことを聞いておりましたが、最終的には、次男の視力障害が私の心を揺さぶつたんです。

次男が五年生のときに、担任の先生から「医者にするのなら、そろそろ勉強が必要ですよ」と言われました。息子も勉強すれば百点、しなければどうしようもない、といった状態でしたから、女房がつきつきりで、かなり濃厚な個人教授をやつたんです。

ある日、国語の教科書に目をくつつけて読んでいるのを発見したんです。半年間ぐらいの間に視力はどんどん落ちていきました。坂戸さんや船越さんが、しきりに心配してくれて、夜遅く来て下さいました。

そのとき、山地さんが「私も長男を亡くしまし

た」と言われてから、女房も話をよく聞くようになりしました。

私は、天職の医学を通じて世のため人のため粉骨砕身しておれば、自ずと家族は平穩無事に、あとからなつて来るものだと思つていました。

ところが、天職とは人の道のことだったので。この道は「人の道だけではなく人の道以上の何かがある」と言われております。

諸般の事情は、なんとか格好をつけてきたけれども、とにかく、心身とも疲れ果てていたことは事実です。今から思いますと、すべては、天から仕廻して下さつたのだと思ひました。

ともあれ、父の没後十七年目でしたが、お父さんを想い出すと、「先祖の加勢がある」という内容のご明断を戴きました。大略は次のようでした。

お父さんを思い出して天上からご加勢を

ご明断

「お父さんがね　今　天上でね　本当にわいわい沸いているんですけれども　何も当てがないのですね　本当に苦しんでおられますよ」

「それで　貴方が　本当にお父さんを思い出した

らね ご加勢がありますよ 有難いお父さんをね
戴きなさいよ 分かりましたか」

「ハイ」

「あなたさんはね 何もかもね つらいつらい
つらいってね つらいことだらけでしょ どうで
す？」

「ハイ、まあ、そういうことばかりではないんで
すが」

「つらいというのはですね 気持ちがどうもね
はかばかしくないんですね もう嫌らしいとか
とんでもないとか何だとかいうことだらけです
ね」

「夜 お休みになる前に 毎晩ですよ お父さん
を思い出して お父さん有難うございました と
おっしゃい それが絶対です」

「これから変わりますからね とにかくお父さん
を 今晩早速 思い出しなさいよ それで結構で
ございます」

「天上からのご加勢によって 今のこの地べたの
ね 悲しいことや何かが 救われるんですから
ね」

「あなたね ご自分が人を色々と あれこれとご

苦勞なさいても それだけではね 何の答えもな
いんです」

「おとうさんが有難いんです 天上がはたらくん
です その不思議さを色々と 知らされるときが
来ますからね」

「ハイ」

「自分は 天任せにするんだなあ と 大したこと
だなあと こう思って喜んで下さいよ」

すべてを自分一人でやろうと思わないで、お父
さんを思い出して天上のご加勢を求めるところを教
えて戴いたように思いました。

「天へ借りを果たすこと」にやりがい

「長男さんが亡くなったということはね 天に借
りがあったんだなあということね 知らなかった
でしょうけれども 天へのお詫びですよ その
長男さん 眠っていますよ 幾つで亡くなった
の？」「九歳です」

「その時分 子供さんは神様です これがね目あ
いて はたらき出したら有難いんですよ」

「あなたね どうしてもね 今のご自分ではね
本当に 前生に沢山借りがあるんだということ

ね、業ですよ借りだらけですよ」

「これをお知りになったらね、さあ俺はやるぞやるぞってね、気持ち湧き出しますよそれであなた、お徳しますのよ」

長男の早逝は天への借りだったので。他にも前生からの借りが沢山あると知りました。それらを果たすには「男の一理」だとも知りました。

この道の最も有難いところは、①身辺に起こることは、一切の原因が自分の業にあると知らされたこと。それによつてみたまさんを湧かして戴けることです。②有難いことが何かを教えて戴けたことだと思ふんです。

世間でいう有難さと、この道の有難さは、まったく次元が違うんですね。救われた人生を送るためには、因縁を果たすという約束事がある。これは生まれて来た以上、誰でもが必然的に果たさざるを得ないものですから、それを教えて下さつて導いて戴けるという有難さは、かけがえのないものだと思います。

婿養子と男の一理

こういう言葉も戴きました。

「奥さんにどうしてもね、今ね、大分遠慮がありますよ、これからあなたの意のまま、思った通り、どんどんね、奥さんにおっしゃるんですよ、これをね、はつきりね、ご本人に言っておおきになる方がよろしいからね、遠慮がありますよ、とんでもないんですよ」

小林 実は私は、同じ小林姓で、養子に入っているんです。ふた従兄弟になるんですが、私も女房も教育者の家に生まれました。

これは私の因縁なのでしようね、私の父親も養子なんです。私の母方は長男が亡くなつて、次女だった母が養子を迎えて後を取つた。女房の家も、全く同じケースです。

「お父さんに、何もかも似ていますよ」とご明断の始まりにおっしゃいましたが、現実面でもハンコでついたようなんです。

親父が臨終のときに、「完ちゃん、お前に頼むよ」と言つたのが最後の一言だったんですが、それが何かということが、この道に繋がつて分かせてもらったということです。

おつながりを得まして、丁度二年経つていました。もう毎日でも場に居たいわけですから、せつ

せと戻つてきて、お仕込みも、それまでに十八回、日限りも二回戴いていました。ところが、そのことごとくが、いわゆる、「叩かれる」お言葉でした。

「お前さんという人は みたまさんが この男は 実に聖人なんだ こういう風に云っている どうしても 自分を殴つて 男の一理をたておすんだ 人間というものは やっぱり 神様ではないんだ」

「いよいよのときに 今のお前さんぐらいでは 困る困る」「知らんふりして 何とまあしくい ですね」「果たしの果たし」というのが続きました。結婚生活というのは、この広い世界から、たった一人を選んだ嫁だから、自分の思うような格好に育てるのが男の責任だったのに、私は、それを放棄していたわけですね。養子に入ったという思いがあつて。

角を立てるよりは、家庭争議にならない方がいいと思つて、聖人ぶつて逃げてきた。それを親戚中は、倫理道德上で、よしとしてきたんですけれども、「男の一理」がしぼんでしまった。みたまさんとしては「つらいことだらけ」というものがあつたんだと思います。

婿養子としての遠慮は、うわべだけの聖人君子です。この道は修養以上の道と気づかせて戴きました。

自分建替え

そうして、五十八年四月のお仕込みの中で、次のように戴いたんです。

「さあお前さん お肚の方から 色んなことを知らされたらば それを実行 それが本当」「男らしく 絶対々々 一切合財この道式にやりかえるんです それをしなかつたら 駄目だく 駄目なんですよ」

家へ帰つてから、どんなやり取りがあつたのかは覚えていませんが、今まで言わずに済ましていたものが、言わざるを得ん、となつたのでしようね。横に息子もいたんですが、「俺の言うことを聞けない奴は、出て行け！」と、女房を怒鳴りつけたんです。

私としては、「主人の意に沿えない分は出て行け、それ以外は残れ」という気持ちがあつたんですが、女房は、怒鳴られたことで、一切を無視されたという絶望感に陥つたようです。

「女房はきつちり抱きながら仕込むのが本当だよ」と言われそうですが、二人とも生まれて初めてという場面では、頭の理屈通りには行かないんですね。このときの女房のシヨックは存外大きかったようで、暫くの間は、時々は異常と思われ行動を見せ、家事も手につかんといいありさまでした。

視力の落ちた息子を中学校へ出し、外来患者の診察をするだけで精一杯なのに、入院患者の世話も大変で、疲労困憊でした。

もちろん、場へは毎月帰参しておりましたが、その頃、松の間で二人ずつ道友の前でお話をするということがあり、担当の日に、心神喪失の格好で戻つて来ました。そして、その日にお仕込みを戴きました。

「お前さんは この間 この道のこと びっくりく 喜んでく もうこれからは 何とも云えない 今のご自分は 如何にもく 男の一理を 堂々と あの手この手で 喜びに喜びが 湧き出ている」

「ご自分が実行く そこでく 素晴らしい自分を皆さんに見てもらうから お前さん偉いんでは

ない ご立派です お前さん これからのご自分 堂々と 天上にお礼ですよ」

このお仕込みを頂戴してから、私は何となく、気を取り戻すことが出来ました。

その後も、女房はよくなったり、不安定な状態に成つたり、時には入院するということもありました。そんなことが三年ばかり続きました。

女房にしてみれば、病院、家、息子のことが気になりながら、自分で自分をどうしようもなかつたようです。

奥様のお仕込み

——普通なら「実家に帰ります」ということになるのですが、養子ですから実家はないんですね？

小林 私たちは病院の三階に住んでいましたから、実家は別にあつたんですが、親にも話せないということがあつたんでしよう。

女房は、おやかたさまの御面接を、二回戴いて、短期下座もしていますから、この道が本当だということとは分かつていて、何としても、自分自身で通らなければならぬとは思っていたようです。

ますが、平成二年に、この道にご縁を戴いて、青年として立派に立ち直りました。

ご縁がありまして、辛抱強い嫁を貰い、長女が授かりました。この四月から、私どもの神戸の医療関係の学校で学んでおります。

私の病院は天成会という医療法人で、昭和五十九年という、私にとって女房とのお行が始まった年であり、私の医業としての転換の年でもありました。それが男の一理だったのです。

それは、ただ、天職を全うすればいいと考えていた私が、「本当にやりたい道式の医業をやるんだ」との思いに変えて戴いた、有難い転換のときでした。

後から考えれば、これが、ご明断で言われた、父を思い出すことによつて成つてきた、「天からのご加勢」であり、また、「男の一理を通す」という意味であつたのだと思ひました。

平成は一月七日の私の誕生日から始まりました。天成会の命名が、「地平らにして天成る」という出典を戴いたものであつたことは偶然とは思へませんでした。

「道式の医業」を決心して、場に戻つて来たら、

お仕込みがありました。五十九年四月一日です。

「お前さんは、多少なりともお手伝いしようなあと 思い方をコロリと変えて お戻りになりましたね…頼むく 頼みますわな」

この道につながつて、おやかたさまから育てて戴いた医者としては、患者さんに人間本来性を知ってもらふことが第一義ですよ。そのためには、

「みたまの存在を知つてもらつて、その能きに添うことが、本当は健康への第一歩だ。病氣は医者が治すのではなく、本人の思いによつて無くなつていくのです」

と、説明しなければならぬ。しかし、私には時間がない。理の濃い方がいらつしやつたらなあ、と思つていましたら、堀三郎さんが現れたんです。ねりあいを重ねるうちに、「質素でイワシをしやぶつてもいい位の思いで、一緒にやり始めましょう」となつて、薬局をたたんで来て下さつた。私のお仕込みの日からですから、もう十年になります。

それからは、時間があると二人して患者さんに理をお伝えすることをやつたんです。症状の治療

する法の世界で偉い人はわんさかおるわけですから、必要なときには、医師は応援に大病院から来てもらっていました。

右手であやし左手で抱く

ところが、ある日ふと、赤ちゃんを抱く姿が浮かんできたのです。

どなたでも、左手で抱きますね。右手はあやすだけです。おやかたさまは、目に見える現象の世界、つまり法の面を、『右』とおっしゃいます。反対に、目に見えない理の世界は『左』なんです。そうすると、今迄の医学は右手ばかり使っていました。つまり、あやしているだけに過ぎなかった。これからは、左手をしつかり使わないと、本当の意味で、人類を抱くということは出来ないわけです。

それ以来、私は右手の専従者を探しました。自分は左手に専念しようと思っただけです。そうは言っても、「私はひっこむから、あなたにやってほしい」では、誰でも不信がりますわね。いまのドクターに来てもらうまでは、およそ三十人の方と話し合いました。

た。

回して戴いたのは、阪大から医学に進んだという、お人柄も立派で、素晴らしい方なんです。

「あたらしい道のことはノータッチで結構です。症状治療の右手はお任せする。私は左手で抱きたい。必要とあれば、右手のお手伝いもします。小さいけれども、小林内科を日本一の病院にしたい」と言つて、お願いしたんです。

ところが、面白いことに、その先生の奥さんと、うちの女房も交えて会食をしましたら、奥さんが、「私は気に入ったわ」「そんなのが好きなんです」とおっしゃるんですよ。

しかし、今の病院経営は非常に厳しいですから、二人のところ、三人になると、当然、収入は圧迫されるんですが、「お金で済む事なら、いいじゃないか」と、ここでも、肚を決めました。

こうして、精神面は調いましたけれど、現代の医療は、先端技術とタイアップした種々の機械ができています。それも揃えよう。世間に遅れの無いものがバッチリあつて、その上に理を具えたものでないといけない。

まあ、試行錯誤の連続ですけど、あたらしい

道を変な風に見られないように、極力注意しております。

理と医療

——患者さんに、理そのものはおつしやらないのでしよう？

小林 そんなことはありません。初めからおしまいまで言わせてもらいます。もちろん、話さない方がいいと思つた人には言いませんが……。

少なくとも、今迄の医療が一番大きく間違つていたのは、患者の思いを治さなかつたということですからね。

元々、人間が健全に生まれている以上、その健全さを損ねないようにするのが医者であつて、患者を治す立場ではないんですね。患者さんが治つていく立場なんですから。その辺を、大きく反省させられております。

患者さんが理を受け止めたら治るのかどうかですが、それは形には見えません。しかし、結果として、小林内科へ患者さんが来なくなつてもよいわけです。二回が一回、一年に一回が五年に一回になればいいんです。

生かされている元に気づかされてね、（自分はこの風に建替えよう）となつて、私の周りから患者さんが段々減つて来たたら、初めて、国から医師免許を戴いている者の果たしが出来る、とそう思つております。

もちろん、患者さんが減ると病院経営に差し支えますが、今のところ増える一方で、入院も十九床が超満員です。先生が若いし優秀なせいでもあるんでしようが、私が苦通りをして行けば、何れは理想の格好になつて行くと思つています。

一人ひとり一切の面倒を見て戴いている

結局は、道友一人ひとりが、安心立命できるところまで、持場々々で、きつちりと、果たさせて戴くということではないでしょうか。

おやかたさまと、上々々の上因縁でおつながり戴いたときから、その一切の面倒をみて下さつているのだと思ひます。

——私たち一人ひとりの実行が、そのまま天意をお伝えしているのだと思ひます。

本日は、有難うございました。

〔月刊誌〕平成六年十二月号より

追
想

喜びの下座 松竹梅

東京 (故) 長塩英治

昨年十一月、私はお繋がり十年目にして初めて十日の短期下座を通らせて頂きました。紹介者のNさんが三月の下座中ということで熱心に勧めてくれるのですが、ようやくその気になると予定が入って中々決断しかねておりました。

私があたらしい道にご縁を頂くきっかけは、K代議士と場にお供したことからです。「十日も留守にして仕事は大丈夫か」と言う代議士の親心に私が返事を躊躇していると、そばでK夫人が「海外視察も長いことでかけられるのだから大丈夫、喜んで下座していらつしやい」と励まして頂きました。

いよいよ当日になると「自分は頭空っぽ、天任せで励みます」と誓っておきながら何を迷っているのかという思いが突き上げてきます。何はともあれ場に返ろうと決心して支度をする、何時も

そこには居ないはずの父が「何しに大阪へ行くんだ」と尋ねるのです。

「とにかく行つて来ます」と答えて、あとは家内に任せると電車に飛び乗りました。

下座のねりあい「親子の理」で始まりました。おやかたさまが親を頂き切れない私を待たれていたような気がして、喜びが湧いてきました。

お父さんを頂かなければ先祖は加勢できないという天の理を、改めて頂き直す事が出来ました。

私は父から小さな会社を受け継ぎながら地方議員を務めて二十年になりますが、二役を満足にこなしてきたとは思いません。それどころか不景気で会社の実情を知る親には、心配のかけ通しです。それでも父親に文句を言われると反発する自分の我を押さえ切れないでいたのです。

去年から私の長男が会社の仕事を手伝うように

なりました。息子を当てにする立場になつて、自分が親の期待をはずしておきながら当たり前のつもりでいたことを反省しています。父は私に全てを任せて隠居するつもりでいました。だから、長男の私が選挙に出るのは最後まで反対でした。

それがどうしても出馬することになり候補者の親として頭を下げなければならぬ立場を強いられたのです。仕事にも追われ大変な思いをさせました。このごろは老いて益々頑固な父ですが、背中を丸めながら杖を突く後ろ姿を浮かべては内心で詫げる私です。

十日間のお行の用途は、親を頂く事だと思ひました。下座の作業で駐車場の清掃をさせて頂いた時の事です。

中に停車している一台のバスを囲んで近所の方らしい数人が本を立ち読みしていました。羽曳野市役所の移動図書館です。年配のご婦人が一冊の本を手に行っているのが目に留まりました。有名な作家の書いた『生きるヒント』という題名の本です。

私はこの『あたらしい道』にこそ人を生かす総ての元があるというのに、どうして気が付かないで通り過ぎるのだろうか、縁の不思議を思いまし

た。

それでいて、私自身が毎月のように場に戻らせて頂きながら、下座部屋の前を平気で通り過ぎていたのです。なにしろ、下座とは思ひ方が大切で、実際に三ヶ月も入るのは暇人のする事と勝手に決めつけていました。

ところが、この度の短期下座で、私は下座部屋の素晴らしさをしみじみ体験させて頂きました。

毎月がお正月のように穏やかな気分でした。朝から一日中、「よろこびの下座、松竹梅」の鼻歌交じりで作業しました。歌が自然に湧いて来るのも不思議です。下座の皆さんが、おやかたさまにじかに抱かれているのを感じたようです。私は下座部屋の一部はおやかたさまが特別に用意された子供の保育室ではないかと思うのです。無菌状態にしたまま完全に外から隔離して、望まれるような道の子を育てられる所で、その為にはどうしても子供になりきることで、それでなければ親として手のつけようがない筈です。

下座部屋のねりあいは、おやかたさまとご一緒ではないかと感じる程、お肚に沁みるものでした。親子の理を通して、不肖な子や薄情な子では育

てようがないと思いつながら、それでも親子の絆は
きれないおやかたさまの御苦労を改めて頂きまし
た。それは肉体の親の思いにも共通する事だと気が
付くと、私は不肖であつた自分が情けなくてお
詫びするばかりでした。これまでの私は、場には
毎月行かなければならないというつもりでした。
戻りたいというよりも帰参するのが務めだと思つ
ていたのです。

天は親なりと知りながら、親から見れば水臭い
子供でした。十日を通つてみたら、親が待つ大阪
の場のぬくもりが胸に沁み渡りました。

世直りは、あたらしい道の間から始まると頂い
ています。

その為にも、子供たちが仲良くして親の思いに
添うのが本当だと気づかせて頂きました。

(リバイバル「月刊誌」平成八年一月号より)



もと
おりの
なが
本居宣長

熊本 満崎 安

山桜と大和心（魂）

しき嶋のやまとごころを人とはば

朝日に匂ふ 山ざくら花

もとおりのなが
本居宣長六十一才の時の歌です。日本人が本来
持っている大和心とは、どのようなものかと人が
たずねたならば、朝日に「匂ふ」、美しく照り映
えている山桜の花のようなものだとい私は答えよう
という意味の歌です。

「匂ふ」について、文芸評論家の小林秀雄氏は「色
が染まること、照り輝くこと、香りがあり、匂い
もあり、触覚、視力を総動員しても表現できない
艶っぽい、元気のある盛んなありさま」と語って
います。

宣長は「ものぐるほし」ほどに桜に振り回され、
溺れ憑かれたように桜の歌を詠んでいます。

死の一年前の夏から初冬にかけて桜の歌ばかり
三百首を詠んでいます。

わが心 やすむまもなく つかはれて

春はさくらの 奴なりけり

私の心は、春が来るともう騒ぎ出して桜に振り
回されて、自由を失った奴隷のようになってしま
うと詠んでいます。宣長の桜への異常な愛着が伝
わります。

遺書には、「山の中の墓は粗末なものにせよ、
後に山桜を植えよ、それも一番いゝ木を植えよ、
枯れたら取り替えよ」と指示しています。

死んでも美しい山桜の花を見たかったのでしよう。

桜とやまと心(魂)について、宣長の師である賀茂真淵は、「丈夫の雄々しく、強き、高く、直き心」と言っています。

一方宣長は「己れの腹中のものにして、一層強く、神代上代の諸々への事跡の上に備わりたる皇国の道、人の道を体した心」と述べています。

宣長の思想には、戦闘的な性質はないし、平和なものだと思います。

しかし、真淵と宣長の思想が、国学者たちの思想上の教典となり、明治維新の指導精神としての王政復古に絶大な影響を与えました。

又神社宗教の教典と目され、「建国の神典」と呼ばれました。

因みに、おやかたさまのお示しは、「やむにやめんやまと魂は、理にあり、理は元にあり、根本は根にあり、根はへソと日々叫ぶ」とあります。

おやかたさまによつて、仕込まれ、磨かれたみたまさんの能き、ご供さんがやまと魂ではないでしょうか。

宣長の「人の道を体した心」以上の天からの「日

本人よ。かくあれ」との雄叫びであります。

宣長の経歴

本居宣長は、三十五才から六十九才までの三十五年かけて、「古事記伝」四十四巻を刊行した人です。

宣長は享保十年(一七三〇)伊勢松坂に生まれました。家業は木綿問屋。宣長十一才のとき、父定利は江戸の店で死亡。第一人、妹二人と共に母お勝の手で育てられました。

十九才のとき、紙商今井田家に養子にやられ紙商人となったが、二十一才のとき、離縁して家に帰ってきました。

離縁の理由は、「ねがふ心に叶はぬ」とあります。ねがふ心とは学問という意味でしょう。

亡父の家業は木綿問屋であったが、不縁になつて帰つた翌年に倒産します。

母お勝は「宣長は商いにとく、性に向いていない。ただ書を読むことを好むので、学問をして薬師くすしになるがよい」と京都へ行かせました。

母お勝は、女ながら男まさりで、心は賢い人でした。

宣長二十三才のとき、京に上り、堀景山ほりけいざんの弟子になり、三年間儒学を学びました。

又、景山の弟子武川幸順たけかわこうじゅんに医術を学んだ。

二十八歳のとき、松坂に帰り小児科を開業しました。医は生活の手段に過ぎなかった。

この頃から源氏物語の講義を始めています。

宣長の晩年に「門人に与えた歌」

家のなり なお怠こたりそね 雅みやびの

書はよむとも 歌はよむとも

先づ生計が立たねば何事も始まらないという決心から出発した学問の姿勢の歌です。

彼の学者生活を終生支えたものは医業であったのです。

三十五才から、古事記を綿密に、実証的に研究して「古事記伝」を著述しました。六十九才まで三十五年間かけて書き上げた大著です。

日本には文字がなかった時代、漢字で書かれた難解な古事記（七一二）をどう読むか、どう注釈するか、日本語で読めるようにしてくれたのが本

居宣長です。

古事記完成から千年、誰も読めなかったのを二百二十余年前の寛正十年（一七九八）。「古事記伝」四十四巻が完成したのです。

古事記の成立

古事記は「ふるごとふみ」と呼ばれました。最も古く、私たちの祖先が伝えた歴史書です。

即ち、日本人の魂の故郷を記した書です。

古事記の成立は、天武天皇（第四〇代）の発願にありました。それまで様々に伝えられている古い語り伝えを正さねばという天皇の強い発意がなければ古事記は成立しなかつたのです。

稗田阿礼ひえだのあれという記憶力抜群の人が、天皇の口承をよく覚えていた。

天武天皇が崩御されて、二十五年経つたときです。元明天皇（第四十三代）の命により、稗田阿礼の口承を太安万侶おおのやすまろが書き記していった。古語を漢字で表記しました。日本語を漢字で表現したのです。

古事記が完成したのが和銅五年（七一二）です。古事記は上・中・下の三巻から成っています。

上巻は古事記由来を記し、「神代」、神々の世界が書かれています。

中・下巻は「人の世」、初代神武天皇から第三十三代推古天皇までの歴史が記されています

宣長は「古事記は大御国の学問の本、学問の基本であり、最上の史典である」と言っています。日本のことを知るには最上の歴史書と主張しています。

宣長は古事記研究に一生を捧げ、そのよろこびを和歌に詠んでいます。

古事ふることのふみをらよめば いにしへの

手振り言問ことごとい 聞見ききみるごとし

古事記の文を読んでいると昔の人の手ぶり言葉を交わし合っている様子が目に見えるようだ。それがうれしい

現代における「古事記」の評価

明治維新の指導精神と目され、建国の神典と呼ばれた古事記でありました。

第二次大戦の敗戦によって、古事記の評価が大

きく変わってしまった。

建国の英雄と神々は、その実在が否定され、古代祖先の思想と慣習は嘲笑の的となりました。民族の神話や伝統は、その価値が認められなくなりました。自分の国の国家形成を誇りと愛情をもって顧みることを失くしてしまったと思えます。

日本の神話に代わって、ギリシャ神話、ユダヤ神話の神々が神の座につくようになりました。マルクス・レーニン・スターリン・毛沢東らの革命の英雄を迎え入れる日本になりました。

日本の本来性を見失って立往生している現状であります。

このような現状の中、おやかたさまは、「『古事記』を暇々に読んでおきなさい。普段に読んでいたら、古事記の意味が全部お分かりになる。その中で、そこがどうだ、こゝはあ、だってこと、私の身の内からどん／＼言わされます」とのお示しがあります。

又、昭和五十四年四月のお示し

「神代の頃、絶対は大自然の法によって人の道を教えたらしい。そういうことが必ず古事記から皆さんは分からされるだろう」と。

古事記の建替え

宣長没後約二百年、おやかたさまは「古事記には、色々と間違いがある。整理がある」と古事記の建替えをせんめい闡明されています。

熊本の道友K氏が、古事記の間違いの所を何回もお尋ねしたが「大混乱が起こるから、今は言えない」との事であった。

しかし、おやかたさまのご乗示の中には、それらしきお言葉がたくさんある。

例えば、古事記本文の出だしの文言。

「天地の初はじめ発の時、高天原に成りませる神の名は天之御中主の神。次に高御産の神、次に神産巢日之神。この三柱の神は、みな独神にして身を隠したまひき……」の箇所。お示しは「神産巢は天津神より最高である。古事記によると、高御産巢日の次になるが、神産巢がそも初めであるらしい」であります。

古事記の冒頭部分からの間違いをおやかたさまは指摘されています。

岩戸開きについて（昭和五十四年九月）

世界の地球の最初の時に、天は岩戸開きをやら

されたらしい。男でもないし、女でもないし、頭だけで、胴体はなくて、頭に手と足がくっついてる。人間らしいものが初めて出た。

その時に、海に砂と水があつて、そこに頭と手足の人間のようなものが出た。その時にピカッと光つたそうです。それが岩戸開き歴史の始まりだそうです。古事記のいう岩戸開きとの大きな違いです。

創造主神おやかたさまのお言葉。

「この道は高天原には縁はない。高天原には神々のござるげな。その神々とは、この場とは絶対縁はございません。あるのは天じきじきじゃ。天じゃく。皆さんは、天は一つと思いきや。天がこういう」

（昭和三十八年六月）

筆舌に尽くしがたい。想像もつかないお示しに私は、自分の心身が粉々に壊れていく感覚でした。おやかたさまは、古事記の奥の奥まで言及されているように思えます。

それは人類の歴史の始まりのこと。九億年や世界で最初に出来た日本等々枚挙にいとまがない位です。

日本の古事の原点への回帰こそが、世直り、国替えの天意の根本ではないでしょうか。
古事記の根柢の建て替えの天意が分かるように、古事記を読んでおく必要を天はお示し下さっているようでもあります。



本居宣長

「國文学名家肖像集」所蔵 (Wikipedia より)

——しづやしづ——

静御前

神奈川 芹澤和彦



平家が滅ぼうとし、源頼朝が幕府を開こうとするころ、都に静御前という美しい女性がいました。彼女は暴れ者として京の民や貴族から嫌われた木曾義仲を追い払った英雄源義経の妻の一人で、もとはといえ、白拍子として一世を風靡する存在でした。

「白拍子」と言えば、それには三つの意味があります。歌や舞の拍子のことで、極めて単調な拍子であつたらしい

- ・ その白拍子を歌って舞う女性自身のこと
- ・ 単調な拍子に乗せて演じられる歌と舞、及び演じる女性全部を意味します

白拍子の芸は、前段と後段に別れ、前段では當時のはやり歌である「今様」を二、三曲、それぞれ三回ずつ歌いながら優雅に舞い回ります。後段は

和歌を二曲ほど歌いながら、力強く足を踏みしめて舞いまわるのです。

ところが、「徒然草」によると、平治の乱（一一五九年）で殺された信西は、優れた曲を選んで磯禪師という女に教え、白い水干姿に鏢のない刀を挿して烏帽子を被らせて舞わせた舞いが「男舞」と呼ばれていたのを、禪師が娘の静に、その芸を継がせた、とあります。

由来は、はつきりしませんが、当時の白拍子のことを後世の色事中心の「遊女」や「遊び女」と同一にはできません。中には、一部にそれに似た者もいたのでしょうか、それらとは大きく異なる例を「平家物語」から紹介しましょう。

平清盛が栄耀栄華をきわめていた頃、都に評判の白拍子に祇王と祇女という姉妹がいました。清盛は、ひと目見るなり祇王を気にいり、自分の屋

敷にとどめることにしました。祇王の母に、立派な家を造り、毎月、百石の米と百貫の銭を与え続けました。そのうわさは、都中を駆け巡り、祇王をうらやむ声は、都にあふれました。

それから三年経ったころ、加賀国の出身のほしげぜん 仏御前という白拍子が彗星のごとく現れます。「清盛さまが見初めた祇王と、どちらが上手に舞うだろう」などと、うわさがうわさ呼び、大評判です。十六歳の仏御前は、積極的な女性で、

「今をときめく清盛様に認められなければ都一とは言えない。こちらから押しかけて自分の舞いを見ていただく」

と、お屋敷に向かいます。取り次ぎから仏御前のことを聞き、清盛は激怒します。

「この屋敷には都一番の祇王がいるのを知らんのか、そんな者は追い返せ」

すると、そばに控えていた祇王が、清盛をなだめます。

「招きが亡くとも、推参して芸を見せるのが、その者たちの習いです。追い返されて恥ずかしい思いをさせるには、あまりにもかわいそう。会うだけでも会ってやってください」

その言葉に心を動かされた清盛は、仏御前を呼び戻し、今いま様を歌わせませす。「承知しました、では」と、清盛に一礼をした後、祇王を見つめ感謝の意を伝えます。

君を初めて見る折りは

千代を經ぬべし姫小松

おまえ 御前の他なる亀岡に

鶴こそ群れいてあそぶめれ

(訳) あなたと初めてお会いして、私の命は千年も延びるでしょう。庭の池の島に、吉祥の鶴が群れているようです。

仏御前は、三度繰り返し歌います。そのうち彼女を見る清盛の目がかわつてきました。その今様のすばらしさに感動したのか、「そなたの舞いもみたい」と言い出したのです。

舞いこそ仏御前の得意中の得意。その気品のある舞いに心を奪われた清盛は、自分の屋敷にとどまるよう命じます。だが、仏御前は喜びませせん。

「私は祇王御前のおとりなしで呼び戻されたのです。ここで私が、おそばに仕えたならば、祇王様

が、どう思われますか」

その言葉に、心の移ってしまっていた清盛は、「祇王に憚りはばか、そんなことを言うのだな。それなら祇王に暇をやるうではないか。直ちに実家へ戻すことにするぞ」

祇王は、いつかこういう日が来ることを覚悟していましたが、まさか今日が、その時になるとは夢にも思っていなかったのです。清盛の「早く出ていけ」に、泣く泣く住み慣れた屋敷を去ることになります。名残惜しさと悲しみで涙がとまりません。祇王は泣く泣く襖に一首の歌を書き、屋敷を去っていきます。

萌え出ずるも 枯るるも同じ野辺の草

いずれか秋に あわではつべき

「萌え出ずる草」は仏御前、「枯るる草」は祇王のことをさしています。「秋」には「飽き」の意味がかけてられています。

この十九歳の祇王の歌こそ、「白拍子」の教養のすごさの表れと思えるのです。

この後の展開は、本題からそれてしまいますの

で省略しますが、最後は、仏御前は十七歳で尼になり、祇王親子三人もそれぞれ尼になり、四人一緒に読経三昧で暮らし、皆「浄土住生」の本懐を遂げた、で終わっています。

前置きが長くなりましたが、白拍子のことが少し分かってきたところで、今回のヒロイン静御前の話に戻ります。

源義経が、京から源義仲を追い払い、次いで一ノ合の戦いで平氏を破ったころ、都には百日の早ひでりがありました。後白河天皇は、困り果てた人々を見て、雨乞いをしました。神泉苑に百人の白拍子を集め、雨乞いの舞を舞わせました。ですが、次から次へと入れ替わって舞つても、雨は一滴も降りません。ところがどうでしょう。最後に静が舞い始めると、晴れていた空が、にわかにかき曇り、待ちに待った雨が降り始めたのです。天皇は大いに喜ばれ、静に対し「日本一の白拍子」という宜旨せんじを賜り、彼女は一躍都の有名人となりました。

義経と親しくなったのは、その直後のころと思われまます。静の十六歳のときです。ある説によれば、日本一の白拍子を見てみたいものよ、と義経が招いたとも、また、静の方から押しかけて行つ

た、ともありません。

いづれにしろ、都の人々の怨嗟の的の義仲や一ノ谷で平氏に勝った人気の英雄と都一の舞姫が互いに意識しないはずがありません。二人の關係は当初は「熱烈恋愛」とはいきません。なにしろ義経の周囲には、多くの女性が存在していたからです。そんなときに、とんでもない知らせが、兄の頼朝から届きます。

河越太郎重頼かわごえたろうしげよりの娘の良子ながこを嫁に娶れというのです。河越重頼は、保元の乱のとき、頼朝の父、源義朝みなもとのよしともを助け、その働きはめざましかったといわれています。後に頼朝のそば近くに仕えて重視される存在でした。当時、頼朝と義経の軋轢が目立ってきたのでありますから、嫁とはいっても頼朝側のスパイではないのか、と疑われたことがあったかもしれません。

当時は、婚礼の夜まで夫の顔を知らないことなど極めて当たり前のことであつて、義経が勇猛果敢な武将としか知らなかつた良子は、不安と恐ろしさに震えたことでしょう。

ところが予想に反して、義経は女性には、とても優しい男でした。しかし、義経の内には彼に想

いを寄せ、押しかけて来た女性が多くいたのです。それに、義経の方から好んで招き寄せた者も沢山の代よの常識からいつたら、義経はなんと好色の男よと非難されそうですが、当時は、妻を何人持とうと養つてゆける財力と複数の妻を思う広い心情さを持つていれば、世間から非難されることはなかつたのです。

ですから、義経はだれもがびつくりすること平気でやつてのけます。壇ノ浦の戦いで勝利した義経は、生け捕りにした平大納言時忠たいのたけなごむときただ(平清盛の妻持子の弟)の娘初子もとこを嫁に迎えます。兄頼朝との間がぎくしゃくしているさなかに、なんの断りもせず、敵将の大納言の娘と結婚するなんて、なんと無神経のことか。武将としては天才でありますが、こと政治に関しては可哀想なほど無能であります。

義経は頼朝と兄弟であることで、兄が自分を滅ぼそうなどは考えられなかつたのでしよう。しかし、兄弟とは言つても頼朝の母は熱田大宮司あつじの藤原季範ふじわらのすえのりの女であり、義経の母は常盤御前ときわごぜんであつて異母兄弟であります。当時は父が同じでも母が

違うと、全く違つた環境で育つので、赤の他人同様の場合が多いのです。頼朝は自分の権力を万全にするため都で人気沸騰の義経を亡き者にしようと土佐坊昌俊とさのぼるしやうじゆんなる刺客を都に送つたり、得意の政治力と武力を駆使して、義経追討の院宣が下賜されるよう計ります。

頼朝の強圧に院宣が出され、義経は天下の罪人にされてしまった。静と義経の辛い長い逃避行がここから始まるのであります。

文治元年（一一八五）十一月三日、再起を期して、ひとまず都を離れることにする。しかし、そのとき義経に従う軍勢は二百しかいません。また、彼に従う女性が十二人もいました。西国行きが決まったとき、女性たちの身の振り方もあれこれ相談に乗つたのですが、義経に付いていくよりなかつた女性たちです。また、大納言や中納言の娘や、初子など身分のある女性も多く無下に別れることができなかつたのでしよう。静は身分は低いのですが、義経への想いは深く、離れて生きていくことなど考えられず、いつも彼のそば近くにおりました。

義経軍の運命は、都を出るや早くも危機にさら

されます。摂津の源氏、多田行綱が襲つてきましたが、幸い敵の数が少なく、蹴散らすことができ、大物浦へ着きました。

ここより九州に渡り、軍勢を立て直して、頼朝と戦うはずだったのに、皆が乗船したころ、運悪く暴風雨になつてしまふのです。しかし、義経は笠島の戦いかさしまのたたかひのとき、強風を衝いて船を進め、奇襲により勝つたことが過信となり、嵐の海へと突っ込んでいつてしまつたのです。

翌朝、明るくなつて周囲を見ると、浜には船の残骸が打ち上げられ、船の姿はみられませんでした。そんな中で、まず正気を取り戻したのは静でありました。この浜辺で助かつたのは義経よしかげ、武蔵坊むさしぼう弁慶べんけい、堀弥太郎ほりやたろう景光けいみつ、源有綱みなもとのありつなと分かっていますが、あとは散り散りばらばらで、誰が助かつたのかは判然としません。一緒についてきた十一人の女性の生死もはつきりしません。

たつたの五人だけでは、見つければすぐ殺されてしまひます。義経一行は、まず吉野を目指します。ところが吉野まで女の足では無理だと家来たちけらいが止めたのですが、静は、がんとしてききいれません。京にあつて馬上の凛々しい姿の義経を見

て以来、生涯この武將に仕えたいと心に想つていたのです。吉野は山岳地帯であり、修験道の山でもあるので、弁慶たちが引き留めようとしますが「どこまでもお連れくださいませ」といつて泣きに泣きます。義経も困ってしまったて、「では、馬を捜して行こう」といつて、男たちだけ山に入つていつたのです。二日後、馬子が馬を連れてやつて来たので、後を追います。

追いついた吉野山にある一つの堂にこもり二人は名残を惜しんだのでしょう。ここまで登つてくると雪も積もつていて、もはやこれ以上女人を同行することは無理であることを誰もが認めざるをえなかつたのです。また吉野山には、女人禁制の地域があるので、静も泣く泣く別れに同意したのでしよう。それに彼女は、義経の子を妊みこもつていたのです。

義経の姿が見えなくなるまで見送り、義経がつけてくれた五人の従者と共に京を目指して下つていきました。ところが間もなく従者たちは義経が静に与えた金銀の類いを持って、逃げ去つてしまいました。やがて従者たちの悪事に気がついた静は、山中をさまよっているうちに蔵王堂にたどり

着く。その様子がたいへん怪しかったので静を見とがめ、義経一行の捜索をしていた役人の所に連れていく。これまでの経緯を静から聞いた役人は彼女をたいへん憐れんで「休養させた後に、鎌倉へ身柄を進める」と言つたという。

文治元年十二月八日、静は京の北条殿（時政）の御亭に送られてきた。静は、船が難破して渡海できなかったこと、吉野山で五日間逗留したこと、その後は全く行方が分からない、などのことなどを話したが、鎌倉側は義経がどこにいるのか、皆目わからなかつた。

しかし、静は義経の姿を最後に見た証人として鎌倉に送られることになり、母の磯禪師を伴つて文治二年三月一日に鎌倉に着く。そこでの尋問はたいへん厳しかったのですが、静は聡明でありましたから義経に不利になるようなことはしやべりません。逃避行でいろいろと恩を受けた人のことも一切おぼしめません。そこで尋問は打ち切り、静の出産を待つて京へ戻すことに決め、安達新三郎あたらしんざぶろうの屋敷に預けました。

白拍子の舞は、都で大はやりで、中でも静が一、二を争う人気者であることは、遠く鎌倉にまで知

られていた。鎌倉武士たちは、そのあでやかな姿を見たいし、頼朝の妻の政子や奥の女性も、その芸を見たいという。最後は、頼朝の、

「静の舞が所望だ。天下一の白拍子と聞く、それを八幡宮へ奉納してほしい」

と、神様を持ち出されては、今まで断り続けたのだが、頼朝の言葉に従わざるを得なかった。待望の静の舞は四月八日と決められた。場所は静岡八幡宮の廻廊となりました。

当日大勢の家来が臨席し、最後に頼朝と政子が着座すると、いよいよ静の出番である。廻廊は、ただならぬ雰囲気である。都一の舞姫を見る期待と、頼朝に罪人として追われている義経の妾妻としての彼女の立場を考えると、異様な緊張感が込み上げてくるのだ。静は、金の烏帽子に白水干の男装である。あまりの美しさに一同は「おつ……」と、うめき声をもらす。工藤祐経くどうすけのねが鼓を、畠山重忠はたけやましげただが、銅拍子を担当した。

静は白拍子の芸としては異例にも、最初に

吉野山 みねの白雪 踏み分けて

いりにし人の あとぞ恋しき

うつとりと聞き入った人もいたが、「これはたいへんなことになるぞ」と多くの家来が思った。この晴れの席で、頼朝に逆らって追われている夫義経を恋い慕う歌を堂々と歌うなど考えられないことなのだ。そつと頼朝の席を伺う者も多かった。

頼朝は表情をかえず、自分の感情を押し殺しているだけに不気味である。家来一同の心配をよそに静は頼朝をみつめて一礼すると、扇をかまえ、一気にうたいだした。

しづやしづ しづのをだまき くり返し

昔を今に なすよしもがな

(訳) 米を取る作業をしている身分の低い女たちが、糸をくるくる巻いていくように、頼朝様と義経様が仲のよかつた昔に戻す方法はないものではないでしょうか

見聞きしていた者は皆感じ入って、ものも言えない雰囲気で涙ぐむ者もおおかつた。

ところが、頼朝は激怒したのだ。

「八幡宮の神前で芸を披露する時は、当然関東の平安長久を祝うべきなのに反逆者を恋い慕うとは

けしからん」

たいへんなことになった。一同なすすべもなく
途方に暮れているところを救ったのは頼朝の妻
政子まさこであった。これでは静の命さえ危うくなる。

「貴方が流人として伊豆にいらつしやつたころ、
私と契りを交わしましたが、父時政は平家の力を
恐れ、私を閉じ込めてしまいました。しかし、私は
なお貴方を慕つて、暗夜に大雨の中、貴方の所に
いったのです」などと、昔のことを縷々るる話し、そ
の時の自分の心と今の静の心は同じであると説得
する。そのため頼朝の憤りもやんで、褒美として
卯の花重はなかさねの衣を与えられた。

静の振る舞いは周囲から絶賛されたが、その時
お腹の子は順調に育っていた。「もし、生まれた
子が男だつたら、武家の習い、殺してしまふ」と
いわれ、女子の出産を願つたが、月満ちて閏七月
二十九日生まれたのは男児でした。頼朝の命によ
り安達清経あだちきよつねが赤児を引き取ろうとしたが、静はど
うしても渡そうとせず困らせた。清経が頻りに叱
責するので、静の母磯禪師が赤児を奪い取り、役人
に渡す。静の子は鎌倉の由比浦の海に沈められた。
当時の処刑方法は、男性なら打ち首か切腹、女性

と子どもは水死と決まっていたのです。

産後の体が回復し、失意の静と母が都へと旅
立つたのは九月の半ばでした。

その後、静は出家して仏の道に入り、嵯峨野の奥
に一字の堂を立て、ひっそりと暮らしたそうです
が、一年ほどの後、露のようにはかなく亡くなつ
てしまったということです。齡二十の若さであつ
たとか。

参考書

・現代語訳吾妻鏡 二巻、三巻

五味文彦・本郷和人 (吉川弘文館)

・鎌倉北条氏の女性 今井雅晴 (教育評論社)

・北条政子 永井路子 (講談社)

・源平の怨霊 高田崇史 (講談社)

・平家物語 木村耕一 (二万年堂出版)



葛飾北斎 静御前
(Wikipedia より)

羽曳野物語 (三)

柳田 節

第三章 天智天皇の想い

―羽曳野と天智天皇―

ここで、この地で活躍されたと思われる天智天皇の話になります。それは自然と、道友の羽曳野への思いにつながるからです。

令和元年八月に、大阪の道友中野和典さんの月刊誌の記事が始まります。内容は中野さんが、羽曳野に雷が落ちると同時に、天智天皇が羽曳野に現れる夢？ をみた、という話です。

この話を聞いて私は「みたまさんからだ」と感じました。ここは古代の都のあつた地域だから、天智天皇がすぐそばにおられたとしても不思議はないと思います。丁度、私も羽曳野の土地柄に関心を持ち、色々知り始めたときでした。

ところが、しばらくして、中野さんが「私は夢を見たのではなく、自宅を感じた実際の話です」というのです。え？ 私はてつきり、架空の「夢」の話だと思ひ込んでいました。同じようなものですが少し違います。その中野さんの体験談（月刊誌五二三号）はこうなのです。抜粋紹介します。

○羽曳野に天智天皇が……

「頭空つば 心はない」中野和典

ある曇天の日、自宅で妻と二人で食事をしていました。ちょうど話が途切れ、食事を無心でいたっていた時だ。自宅の北東の方向でゴロゴロと聞こえたかと思うと、破裂したような強烈な雷鳴がすぐにやって来た。窓ガラスがビシビシと響く。しかし、近所ではない、距離はややある。雷は羽曳野丘陵北部に落ちたと思つた。

「天智天皇が来られた」

ひとりでに口をつけて出てきた。その雷の知らせは、単なる大きな雷さんではなかった。

それを聞いた妻はいぶかしがって言う。

「そんなふうになら言ったら変に思われますよ」

そうだったとうなずく。至極もつともなことだ。

——これが、中野さんが「天智天皇が来られた」と感じて自ら口走ったという体験談の初めです。

天智天皇についてのご垂示があります。中野さんはその頃、松の間で戴いた天智天皇に関するご垂示がしょっちゅう思い出されていました。ご垂示当日も強い雨が降った。松木草垣女史のお言葉と共に、大きな雷が鳴り響くのが聞こえたそうです。

中野さんはご垂示を、天智天皇のみたまさんが来られ、あたらしい道に加勢されている。でも、同時に、雷さんが落ちたのは天から叱られたんだと悟って、これをきっかけに事あるごとに自分に厳しく受け取らねばと思うようになったそうです。話はそこから、中野さんが身上の知人との再会したときの話に飛びます。中野さんは最初、他人の身上のことなので、その知人に何を話している

か分からず困りますが、話しているうちに自然に言葉が浮かんできました。お肚の方から自然に言われた、ということ、**「頭空つぽ心はない」**という体験談だったというわけです。

お式のご垂示とは昭和五十年九月のもので、

「しにくい気持ち、ゴツソリと自分建て替えを」と仰ったあと、「あたらしい道 天智天皇から今そこで 見られています これだけ 喜んで土下座する お前さん達 仕合せ者です 何もかも 絶対です 有難いなあ」

とされています。天智天皇が本当に来られたかどうかは分かりませんが、落雷があり天智天皇が来られたと中野さんが思ったことは、事実だったのです。中野さんは、その「天智天皇のご垂示」が頭を離れず、それで、天智天皇のことが口をついて出てきたのかもしれない、と言います。因みにこの原稿の題名は『頭空つぽ 心はない』です。みたま通りで自分がないことがテーマでした。

そこから、病気の知人と再会することになります。いざ会ったら、言うべき言葉が浮かんで来ないと思ったのに、その内、いい具合に言葉が浮かんで来た、という話でした。別に夢を見たわけ

ではないのです、との中野さんの指摘でした。え、そうだったのですか、と戸惑う私にもう一言、付け加えてくれました。天智天皇のことは、以前、他の方が月刊誌に書かれていますよ、参考になれば、と教えてくれました。

その記事を探してみると『白日夢』という文だったのです。(月刊誌一六七号・平成元年十二月)に、昼間見る「夢」という意味の『白日夢』という文章が載っていたのです。それは大阪の八木隆明さんが書かれた、歴史小説仕立ての作品で、中にやはり、この天智天皇のご垂示が出て来るので、お二人の話は共に羽曳野に天智天皇が来られたという物語なのだと思います、驚いてしまいました。

○もう一人の天智天皇

八木さんの話を要約してみます。

壬申の乱に勝って即位した天武天皇は、天智天皇の御子である大友皇子を斃^{たお}して皇位に着かざるを得なかった。その苦い体験から皇位継承のあり方の重大性を深慮し、後世に伝えようと、稗田阿礼^{ひえだのあれ}を呼んで従来の帝紀を改めて検討することを申し付けた。その場面が達筆に描かれている

のです。

八木さんの、天智天皇について忘れられない記憶はふたつあり、ひとつは、天智天皇といえば『時の記念日』ですが、もう一つは、昭和五十年九月のお式のご垂示だと言います。

「只今より天智天皇がこの道に加勢されます」という意味合いの御垂示があつた瞬間、間近に雷が落ち、恐らく天智天皇もとてもお喜びになったのであろう、と記憶している、と書いておられます。「その天智天皇がおそらくひどくお喜びになったであろうことが、近年あたらしい道の場で行われてきたと、私はひそかに思っている」

と、八木さんは、昭和五十九年から六十三年までの五年間、「松の間」で山本さんの発声に合わせて「日本く」と繰り返し、道友一同で唱和してきたことを挙げています。道友が気を揃えて腹の底から「日本く」と唱えるその声が松の間に響きわたるとき、ああ、この道は本当に国を想うまことの道であるとの感動を覚えたものですが、その声をこの道にご加勢の天智天皇が誰よりも喜んで聞かれたのではないかと八木さんは想像しました。

なぜかと言えば、「日本」が誕生したのは天智天皇以後の治世からで、それ以前は倭国といったはつきりと日本国になつたのは、この天智天皇が国の内外に知らしめたものです（直接的には後の天武天皇以降の天皇方が実施）。

ここで最後に、八木さんが言われるのは、
「では我が国は今や世界の中の日本として、大唐とも対等の外交を進めているが、このようなきに一番重要なことは何であるか。唐に負けない壮大な都を作ることであるのか、或いは諸制度や法律の整備か、或は軍備を充実して、白村江の戦いの轍を踏まないような強力な海軍を作ることか、いずれも重要なことに違いはない。しかし、これらのことは、木に例えれば幹や枝のことであると気がついた。もつと大事なことがある。根である。根がしつかりと培われてこそその幹であり枝である。日本はこの根がすごいのだ。日本は根の国なのだ。この国は目に見えないところに大きな力を秘めている。日本という国は天皇を中心に国民がひとつにまとまることのできる国なのだ。今この国について、の自覚を深めることで……」

○天智天皇のご加勢

八木さんの言われることに同感です。更に思うことは、日本が助かれれば世界が助かる、ということ。白村江の戦いの轍を踏まないよう、強力な海軍を造ることは必要ですが、それは「幹や枝葉のこと」であり、私たち道友のなすべきことは、見えない根の国日本の根を肥やすことだ、と思います。すなわち、力に対し力で対抗するのではなく、徳を以て理を基に浮世を制することです。日本が世界から尊敬される姿を示して、平和裡に世界を導いていくことです。大事なものは、その気概を忘れることなく持ち続けることです。

一夜にして大敗を喫した白村江の戦いでしたが、あつさり負けを認めています。昔の日本人の潔さです。ひと言、「かえりみはせじ」なのです。

己の我欲でした戦いではなく、百済くだらの救援に立ち上がり、大唐に屈せず自国を滅ぼさないうための戦いでした。天意に背いた戦いではないので、日本人は潔くしていられたのでしょうか。日本人は天意、自然に逆らわず、天意に従う民族です。

それではなぜ、有利な戦いだったのに、大敗したのでしょうか？ 大東亜戦争の大敗と同様に大

敗してしまつたのでしよう。

天は、それ以上は望まれていなかったからではないでしょうか。そもそも、戦争をするということが間違ひでした。天意に沿つてはいないことだつたからです。「戦争は業」とはつきり言われています。力に対して力で対抗しようといくさをした。それは天意の望むことではないのです。天は、力に対しても徳を以て臨むことを望んでいる。人々が平和で毎日、喜んで暮らせる世界を望まれているのです。

だからといって、白村江の戦いで天意に背いてはいない日本を見捨てませんでした。その後、鎌倉時代に元が攻めてきたときは、逆に敵が圧倒的優勢だつたのに、一夜にして沈めてしまいました。白村江の戦いは天意に背いたものではなく、しかし、いくさはいかん、というのが天の本当に言ひたかつたことなのではないでしょうか。

占領下で押し付けられた憲法をただ遵守していても致し方ないですが、また、単に憲法を改正して、或いは国防に力を入れても、戦争がしやすくなるだけでは、当然、天はよしとされないでしょう。国防はもちろん必要ですが、最後は、日本国

民が真に天意を悟つて、まず人間同士の争いをやめ、世界中で喜んで暮らせる平和な世界を志すことが、本命のこととなると思います。

戦後七十九年以上を経て未だに日本国民が、平和憲法と世界平和の理念を有難く持たされていることも、また世界で唯一の被爆国として世界平和を発信していることも併せ考えると、日本の国に置かれている立場をよく表していると言えるでしょう。

と言つて、強国中国の中華思想に屈してはならないことは、「日本は古くからの独自の文明を持つている」と言つた西洋の学者、『文明の衝突』の著者ハンチントンの言を俟つまでもありません。東アジア情勢において、聖徳太子の時代から、中国の脅威は、何一つ変わっていないのです。

これからの日本のやるべきことは、一度、元の日本に還ることです。

古い日本に立ち返つて見えてくるものが、必ずある。それは日本にもとからある「よさ」であり、それをいまに蘇らせるのです。私たち日本人には、通り越せないような苦境のとき、草垣女史は、一度元の日本に還ればよい。古くして新しいものが

そこに生まれる、という意味のことを言われているのではないでしょうか。

詳しくは別の機会に触れたいと思いますが、これが常世とこよの理に繋がることだと、私は思っています。土地処すめに皇の理があり、日本の文明には常世の理がある、この二つの理はあたらしい道の中心の理だと思われます。これらのキーワードがあちこちに繰り返し言われています。

天智天皇のご垂示で、

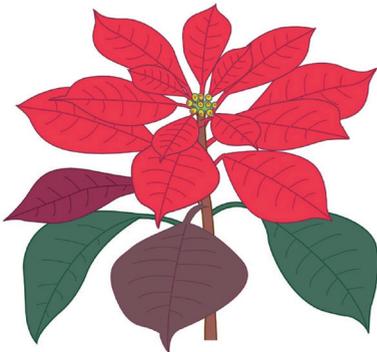
「あたらしい道 天智天皇から 今そこで 見られています これだけ」

「喜んで 土下座する お前さん達 仕合せ者です……」

と、言われていることは、やはり、草垣女史が日本の再建を目指して国を支えるために千人の要人を育てて、昔の大和朝廷ゆかりのこの地から全国に発信しようとしている、このあたらしい道の姿を喜んで下さっているということ、ただ、この道が遅れたことについて、もつとがんばれよ、と言われているのではないかと思えます。私たちがその点、土下座だったのではないのでしょうか。

いずれにしても、天智天皇が来られたというご

垂示の通り、深いご縁のある、この道なのだと思います。



第四章 なぜ世界遺産が羽曳野に？

○天皇家ゆかりの前方後円墳

早いもので、百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されてから五年が経ちます。改めて分かったことは、ここ『あたらしい道の場』は、前方後円墳という天皇家に関係の深い古墳のある、世界でも珍しい所だったということです。

古代大和朝廷（ヤマト王権）の発祥の地の一角であり、一時期は、日本の政治、文化の中心の地でもありました。

私たち道友は、毎月、このような場所に呼び寄せられるように全国から参集してきていたのです。

○世界遺産登録の理由

世界遺産として登録されるにあたっては、堺市、羽曳野市、藤井寺市にまたがる百舌鳥・古市古墳群が、世界的な価値のある遺跡であり、この国の歴史を語る上で重要な場所であることを、ユネスコが認定しているのです。

では、何が認められたのでしょうか。「傑出し

た古墳時代の埋葬の伝統と社会政治的構造を証明している」などが言われています。

また、仁徳天皇陵（堺市）、応神天皇陵（羽曳野市）、履中天皇陵（堺市）の三陵は、日本全国に十六万基以上もある中で、最大古墳トツプ三に入る、いずれも日本を代表する前方後円墳です。因みに仁徳陵の墳丘の長さは世界一で、エジプト・クフ王のピラミッドや中国・秦の始皇帝陵より長いものです。

○百舌鳥・古市古墳群の歴史的意味

さらに、世界遺産の評価として、次のようなことが言われています。

- ・四く五世紀にかけての日本初の豪族連合政権による国家形成の過程を示している。
- ・大化改新に始まる中国の律令制採用以前の日本独自文化。

・前方後円墳が初期皇族の陵墓を証明し、埋葬の伝統を明らかにしている。

また、自治体などによる資料には、

「高度に体系だった葬送文化」「古墳築造が社会の秩序を表現」「日本列島独自の歴史段階——す

なわち東アジアの政治情勢を反映した古代王権の形成・発展過程——を物語るもの」

「百舌鳥・古市古墳群は、古墳時代の最盛期（四から五世紀）にかけて築造された、古代日本列島の王たちの墓群。古代日本の政治文化の中心地であり、大陸に向かう航路の出発点であった大阪平野に位置している」

とあります。



羽曳野に倭王の常備軍団があつた……

○倭王直属の軍団

この世界遺産の百舌鳥・古市古墳群は、大量の武器の副葬品が出土していることから、被葬者と思われる王が率いていた近衛軍団のようなものが、このあたりには常駐していたと考える学説があります。

百舌鳥・古市古墳群を形成した集団について、

考古資料をきめ細かく分析し、軍事学や世界史的な視野から古墳時代の常備軍を復元しようとしたもので、大きく評価されています。それは、一冊の本にまとめられています。

西川寿勝氏と田中晋作氏共著「倭王の軍団」NHK大阪文化センター企画です。百舌鳥・古市古墳群を詳細に調べたもので、興味深いものがあるので、以下に引用します。

……百舌鳥古墳群は四〇〇〜五〇〇年頃、堺市の大地上に築かれた我国最大規模の古墳群です。西に大阪湾を望む四キロメートル四方の範囲内にあり、消滅したものを含めると約一〇〇基もの古墳が築かれました。

一方、古市古墳群は百舌鳥古墳群に並ぶ規模でほぼ同時期に、藤井寺市・羽曳野市にまたがる台地上に築かれました。石川と東除川にはさまれた東西約二・五キロメートル、南北約四キロメートルの範囲に、巨大古墳や倍塚の小古墳まで大小様々な規模の前方後円墳、円墳、方墳などが約一キロメートルが約一〇〇基築かれていたようです。

また、巨大古墳の陪塚などに大量の鉄製武器・
武器の発掘例があります。当時の王権が武力を
背景に国家統一へと突き進み、その力をもつて
古墳を造営したことが分かります……。

巨大古墳時代は王権の軍事力が評価され、巨
大古墳の被葬者像は軍団を統率する王と推察さ
れるのです……。

【百舌鳥・古市古墳群の「軍事基盤」と「常備軍」】

百舌鳥・古市古墳群の勢力が他の勢力を超え
る武器を保有していたことは、古市古墳群の野
中古墳や百舌鳥古墳群の七観古墳などから出土
した武器の量から推定することが出来ます。

しかし、他の勢力を超える武器の保有だけで
は、とくに広範な地域を対象とする場合には決
して十分な軍事的抑止力とはなりません。

不測の事態に対処できる、それも広域を対象
として、専守防衛を目的とし、かつ迅速に稼働
する軍事組織が必要となります。武器を供給す
る百舌鳥・古市古墳群の安全を保障する装置の
必要性です。ここで想定されるのが「常備軍」
です。常備軍とは文字通り、平時においても常

時維持される軍事組織のことです。

【百舌鳥・古市古墳群のもとに存在した常備軍】

常備軍は、畿内とその周辺の武人的性格を兼
ね備えた多くの被葬者とは違った人々によって
編成され、最新の機能を備えた武器によって武
装した軍事組織です。

また、この軍事組織は、有事に際して緊急に
編成されるのではなく、平時においても、彼ら
が所属する百舌鳥・古市古墳群の中核を占めた
者、もしくは特定の組織の下で維持され、その
意図によって展開するという特殊な役割を担っ
たものを言います。いわば親衛軍です。

さらに、ここでいう常備軍は、その成立と同
時に広範な地域に及んだのではなく、当時とし
ては、百舌鳥・古市古墳群のもとにのみ存在し
ました。

【常備軍の成立】

結論を先に言うと、著者は「野中古墳型」の
古墳を以って常備軍の存在を想起しています
……。

この出土状況で著者が最も注目するのは、甲冑とそれぞれに帰属する十一の刀剣です……。甲冑一組と刀剣一体、これらの武器を使用する成員の存在を前提としたものであると考えます。

このような状況は、「可能性が考えられる百舌鳥・古市古墳群の七観古墳と、両古墳群の間に位置する黒姫山古墳の前方部竪穴式石室以外では考えられません。常備軍が百舌鳥・古市古墳群のもとにのみ存在していたと推定する根拠のひとつです。

【百舌鳥古墳群の優れた軍事力】

「大塚古墳型」「野中古墳型」「西墓山古墳型」という複数の武器組成を持つ古墳から構成された百舌鳥・古市古墳群が、いかに大きな軍事力を持つていたかを改めて知ることができま……。

その組織の規模は、はるかに大きなものになる可能性があります。

「野中古墳型」の古墳に納められた武器は、常備軍が帰属した、もしくは組織の核にあつた人物の埋葬に際して、常備軍との密接な関係を

示す目的で、その装備の単位が一括して「陪塚」や前方部の付属的な施設に納められたと考えられます。

【常備軍を必要とした背景】

ここから、この本の要点を書くことにします。

この『倭王の軍団』では、平時、戦時を問わず、常時維持される常備軍には極めて大きなコストがかかるのに、このような常備軍を創設しなければならなかった理由は何か？

それは、国内的要因①「政権内の主導権掌握」と国内的要因②が「首長権の強化」の二つで、さらに国外的要因③として「対国外問題への対処」であつたと考えられます。

まず国内的な要因①は、政権内の「主導権掌握」です。畿内にあつた複数の有力勢力間で主導権獲得のため、強力な軍事組織の創設が必要だつたと考えられます。

また、畿内の古墳時代前期から中期の政権内では、特定の勢力が安定した成長を遂げるのではなく、大和盆地東南部を中心とした勢力から佐紀・馬見古墳を中心とした勢力へ、さらに百舌鳥・古

市古墳群を中心とした勢力へと、政権内の主導権が移動したと考えられます。

そしてそのうち、百舌鳥・古市古墳群の勢力が急速に政権内の主導権を掌握したことを示しています。

これに加え、常備軍以外に「西墓山古墳型」の古墳によって示されます、緊急時に対処することが出来る多量の武器の備蓄は、百舌鳥・古市古墳群の主導性を一層強く発揮できる条件を備えることになったと想像されます。

もう一つの国内的要因②は、百舌鳥・古市古墳群の勢力でない「首長権の強化」です。

両古墳群の首長が、集団を構成する武人的性格を持った各古墳被葬者の意思を斟酌しんしゃくすることなく、自らの意思により自由に、より強力に行使する基礎を整備するために、直属の軍事組織をその膝下に置いたのではないかと考えられます。逆に直属の軍事組織を持ったことで首長権が強化されたのかもしれない。

このことを端的に表しているのが、首長墳である大型前方後円墳と、集団の構成員である中小規模の古墳との間に見られる墳丘規模の格差の急速

な拡大です。

中期半ば以降、百舌鳥・古市古墳群では首長墳と目される大型前方後円墳が巨大化し、これに反して中規模古墳は縮小の一途をたどり、小規模な古墳の数が増加する。首長権が急速な伸張を遂げていたことを示しています。

【高句麗と百済の戦い】

三つ目の、常備軍を必要とした国外的要因③ですが、これは文字通り、「対国外問題への対処」です。

このような武器の供給は、百舌鳥・古市古墳群が甲冑の一元的な供給を行っていたという考えに立てば、その目的は、より多くの人員を同一装備で武装させることにあつたと言えます。百舌鳥・古市古墳群の勢力は、軍事組織の基本的な要件の一つを着実に進めていったことを示しています。

特に西日本を初めとする各地域の勢力を、より大きな軍事組織へ動員することが出来る条件を整えようとしたのでしよう。このような状況は、国内的な要因に明らかに反することで、この現象は、国外的な要因への対処によるものと考えられます。武器の供給はある面で供給者の存亡にかかわる

重要な選択でもありました。最新の機能を備えた武器の供給は、それを受容する各地域の諸勢力を圧倒する百舌鳥・古市古墳群の強大な軍事組織、常備軍の創設によつてのみ本格化したと考えられるのです。

この国外的な要因について具体的に見てみますと、三六九年に始まった高句麗と百済の軍事的衝突、これに続く三〇〇年代末から四〇〇年代初頭の高句麗の南下、さらに四七五年、百済は高句麗の攻撃によつて漢城を失います。

このような朝鮮半島情勢と符合するかのよう、当時の日本列島では武器の急速な機能的向上と生産の拡大、また、整備された軍事組織の確立を目指す活発な動きがみられます。

この時期こそが百舌鳥・古市古墳群の勢力が権内で大きな力を持つようになった時期です。

百舌鳥・古市古墳群の勢力が直面した国内的な要因と国外的な要因を克服するために必要とされたのが常備軍と考えられます。

このような一連の体制の整備は、佐紀古墳群や馬見古墳群で想定した武器の大量集積による軍事的抑止や、突発的で、近距離、短時間の軍事活動

を目的としたものとはまったく次元の違うものだと言えるでしょう。

【古墳時代の軍事的特徴】

古墳時代中期における日本列島の軍事的特徴として、次の二つの現象が挙げられます。

一つは、形状、機能が統一され「定型化した武器」が、「広範な地域で見られる」こと。

もう一つは、堅牢な防御施設を持った「城砦が見られない」ことです。

畿内とその周辺の有力勢力や各地の地域勢力が、領域境界線上に防衛ラインとなるような防塁などを設けた形跡が見られません。

さらに、桜塚古墳群東群で見られるような特定の集団に見られる急速な武装化と、移動や駐留に対応することができる「農耕具が組み込まれた武器」の出現は、長期間の戦争状態、ないしは社会的緊張のもとで、組織的な軍事活動を可能とする軍事組織の存在を示しています。

このような軍事活動が遠隔地に及び、かつ長期になる場合にはその傾向が一層強くなります。

こうした軍事組織は、遠隔地における長期間の

軍務の必要性、つまり、朝鮮半島を対象とした軍事活動の必要性によつて生み出されたと考えることが最も合理的で、これも軍事における通則のひとつであると言つてよいでしょう。

もう一つの特徴としてあげた、日本列島では堅牢な防御施設を持った城砦が見られないこと、畿内とその周辺の有力勢力や各地の地域勢力が、領域境界線上に防衛ラインとなるような防塁などを設けた形跡がないことは、当時の朝鮮半島と比べて極めて大きな違いです。

このことは、各勢力が長期間にわたる深刻な軍事的対峙にまでは至つていないことを示しています。

さらに、百舌鳥・古市古墳群の勢力が政権内の主導権を掌握し、勢力内での首長権の強化が図られたのちも、武器の需要は衰えを見せません。

これらの大量の武器を必要とした軍事的課題が日本列島内だけを対象としたものではなかつたことを示しています。

このような現象は、国内的な軍事課題だけでなく、国外的な軍事課題を含めて武装の充実と軍事組織の整備が進められていたことを示しています。

す。

朝鮮半島での軍事活動にも対応でき、むしろ、それを主目的としていたと考えられます。その軍事組織は、日本列島外での軍事活動を行う外征軍です。

このように、古墳時代中期の日本列島で見られる二つの大きな軍事的特徴は、後の律令軍の本質にも通じるもので、日本列島内で編制された軍事組織が、防衛を主眼としたものではなく、攻撃を優先するものであつたことを示しています。

同時に、日本列島外からの侵略に対して安全であるという認識に基づいていたということですが。

百舌鳥・古市古墳群の勢力による軍事組織の整備は、武器の大量集積による国内での軍事的抑止や、突発的、近距離的、短期間の軍事組織の編制の必要から起こつたものです。

なお、著者田中晋作氏は、古墳に副葬された武器は実用であるとの観点から述べています。

【権威から権力へ】

常備軍を膝下に収めた百舌鳥・古市古墳群の勢力は、同時に当時の社会のあり方を大きく展開さ

せることになったことも見逃すことができませぬ。

常備軍を生み、最新の機能を備えた武器のより広い地域、階層への供給による大規模な軍事的動員を可能とする社会は、軍事力の強化ばかりではなく、「社会の軍事化」や「社会の規律化」に大きな影響を及ぼしました。

このような急速な軍事体制化は、古墳時代前期後半に始まった朝鮮半島側からの継続した要請による現象でした。

このことは、特に移動や駐留に対応できる武器組成を持つ古墳が、社会的地位が相対的に低い新興の中小規模古墳を主体としていることから明らかだと思われれます。

さらに、武器作成の最新技術供与や急速な生産拡大可能な大量素材の、恒常的な供給、また、軍事組織の効率的な諸制度の導入は、当時の倭を急速に武装化させる必要性、たとえば、百済や加耶の強い意図がその背景に存在していたと考えるべきでしょう。

西晋の滅亡に始まる中国北部地域の混乱は、東アジアに極度の社会的緊張をもたらし、同時に中国周辺地域に古代国家形成への足掛かりを与える

ことになりました。

朝鮮半島では、高句麗と百済の軍事的対峙を生み、その影響は加耶を介した倭との軍事的関係に発展しました。

日本列島で見られる急激な武装化は、前期後半に政権内の主導権を握った佐紀・馬見古墳群の勢力によってその端緒が開かれ、中期に入り、これを強力に推し進めた百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで、軍事体制化への道筋がつけられることになりました。

政治的な統合原理がそれまでの「権力」へ転換した古墳時代中期の社会の誕生です。

百舌鳥・古市古墳群の勢力のもとで強力に押し進められた軍事体制化は、当時の日本列島を古代国家へ牽引する大きな要素のひとつになったのです。

(以上、『倭王の軍団』田中晋作氏の所見より)

○羽曳野を想う

以上、世界遺産となった百舌鳥・古市古墳群から出土する副葬品の最新武器等から、皇室に関わる大王に仕える常備軍の存在を指摘する学説を紹介

介しました。

ここ羽曳野は、大和朝廷（ヤマト王権）の直属の常備軍のあった土地柄だったと考えられることが分かりました。常備軍があるいは、道友のみたまのルーツだったのではないかと私には思えてきます。

さらに、その常備軍は国内ばかりでなく、朝鮮半島などへ頻繁に遠征していたことから、おそらく、聖徳太子の弟君、来目皇子と常備軍は、最後の新羅征伐で行動を共にされていたかも知れません。

松本草垣女史が、このような土地処にたどり着かれ、この地で、国替えのための男千人を育てることとなったのは、偶然とは思えません……。

因みに、古い頃の日本に思いをめぐらしますと、古事記などに詳しい静岡県立大学教授の高木桂蔵氏は、「我々はこの世に使命を持って生まれてきている」と述べています。

それは、「国づくりの使命」だということです。

古事記では神世七代の後、国生みを終えたイザナギノミコト、イザナミノミコトに、「国づくりのご神勅が下されています。」

「修理固成」（この漂へる国を修め^{おま}り固め^{つく}成せ）という「今度は国をつくりなさい」という意味のご神勅でした。

以来、イザナギ・イザナミの子どもである我々日本人にも同様に、この日本と世界の「国づくり」の使命があることになる、と高木教授は話しています。

かつての大和朝廷は、正に天が降ろした国づくりの本拠地でした。その河内平野の一角にある羽曳野のことを想うとき、松本草垣女史と我々道友は、この地に国づくりのため、再び集まっているのではないか、そう思えてなりません。



編集後記

最も古いあたらしい道

○この道は、最も古いあたらしい道と言われますが、自分の身の内から色々知らされるようになり、それを実行する道と言われています。

○神代の頃は、そのようなみたま通りの世界でした。みたま通りとなつて元の日本人に還る道でもあります。

○頭を使う知恵の現代に、古来からのみたまによる世界を甦らせる、何と、矛盾した道だろう、という意味のことも言われています。

日本の国柄「教育勅語」

○幕末の開国後、新しい明治の時代に相応しい国づくりは、元の日本を甦らせることから始まつたといえるでしょう。『教育勅語』は、日本人の培つてきた古来の思いが言葉となつたものでした。

リバイバル座談会

○「人の道より以上」とは？

「男の一理」とは？

具体的で分かり易く描かれています。

追想

○故・長塩英治さんのお繋がりへの、本当に嬉しそうな心情が伝わってきます。

日本の人柄「本居宣長」

○「現代における古事記の評価」や「古事記の間違い」について、意欲的な内容に触れています。

大和撫子

○源頼朝と対立した義経の都落ちに従つた静御前ですが、捕らえられ鎌倉に送られます。

○頼朝夫妻の求めに応じて、歌舞を演じた折、義経を追慕する歌をうたいます。

前号の誤字訂正

秋号74ページ3段目7行目

(誤) 毎月

(正) 毎日

お詫びして訂正させていただきます。

季刊誌「あたらしい道」のご購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

(年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。各発行月の前月15日までにお願い致します)

申込先

あたらしい道本部

電話番号 0729 (56) 7971

FAX 0729 (57) 5100

季刊誌「あたらしい道」 令和6年冬号

令和6年12月8日発行 (第541号)

発行責任者 中井 健

編集責任者 柳田 泰

発行所 一般財団法人 あたらしい道
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18
〒583-0872 TEL: 0729 (56) 7971

印刷所 キクイ印刷工芸社
大阪府羽曳野市古市6-12-9
〒583-0852 TEL: 0729 (56) 6881

季刊誌「あたらしい道」

令和六年冬号

〔541号〕

（2024年）

一般財団法人
あたらしい道